軽海西芳寺遺跡

1994

石川県立埋蔵文化財センター

軽海西芳寺遺跡

石川県立埋蔵文化財センター

軽海西芳寺遺跡

目　　次

頁

例　言

第1章　序　　説 …… 1

第2章　軽海西芳寺遺跡の環境 …… 3

第1節　位置と地理的環境 …… 3

第2節　歴史的環境 …… 3

第3章　平成3年度調査の遺構と遺物 …… 9

第1節　概　要 …… 9

第2節　各　説 …… 12

1　掘立柱建物跡 …… 12

2　土坑 …… 14

3　溝状遺構 …… 16

4　ピット …… 18

5　包含層出土遺物 …… 18

第3節　まとめにかえて …… 24

第4章　平成4年度調査の遺構と遺物 …… 27

第1節　概　要 …… 27

第2節　遺構と遺物 …… 27

第3節　まとめ …… 30

図 版 目 次

図版第1　空中写真　軽海西芳寺遺跡の位置（昭和59年11月23日撮影　縮尺10,000分の1）

図版第2　遺　跡（平成3年度調査）

(1)　遺跡遠景（西から）　(2)　調査区全景（南上空から）

図版第3　遺　跡（平成3年度調査）

(1)　調査区全景（東から）　(2)　調査区全景（西から）

図版第4　遺　跡（平成3年度調査）

(1)　調査区全景（西から）　(2)　第1号～第10号溝（西から）

図版第5　遺　構（平成3年度調査）

(1)　第2号掘立柱建物跡（南から）　(2)　第3号掘立柱建物跡（北から）

図版第6　遺　構（平成3年度調査）

(1)　第11号溝（東から）　(2)　第12号溝（東から）

図版第7　遺　構（平成3年度調査）

(1)　P13の礎板　(2)　P48の礎板

図版第8　遺　物（平成3年度調査）

図版第9　遺　跡（平成4年度調査）

(1)　表土除去作業（西から）　(2)　表土除去作業（東から）

図版第10　遺　跡（平成4年度調査）

(1)　調査区全景（東から）　(2)　調査区全景（西から）

図版第11　遺　構（平成4年度調査）

(1)　道路状遺構の可能性のある溝群（北から）

(2)　第2号溝全景（北西から）

図版第12　遺　跡・遺　物（平成4年度調査）

(1)　第2トレンチ　(2)　出土遺物

挿　図　目　次

頁

第１図　軽海西芳寺遺跡の発掘調査箇所（縮尺5,000分の１）…… 1
第２図　小松市位置図（縮尺3,000,000分の１）…… 3
第３図　軽海西芳寺遺跡と周辺の遺跡分布図（縮尺25,000分の１）…… 4
第４図　軽海西芳寺遺跡周辺の地形図（縮尺50,000分の１、明治42年測図）…… 7
第５図　調査区区割図（縮尺1,000分の１）…… 9
第６図　調査区全体図（縮尺300分の１）…… 10
第７図　調査区土層図（縮尺60分の１）…… 11
第８図　掘立柱建物跡実測図（縮尺80分の１）…… 13
第９図　土坑実測図（縮尺60分の１）…… 15
第10図　溝状遺構実測図（縮尺80分の１）…… 17
第11図　遺構出土遺物実測図(1)（縮尺３分の１）…… 19
第12図　遺構出土遺物実測図(2)（縮尺３分の１）…… 20
第13図　遺構出土遺物実測図(3)（縮尺６分の１）…… 21
第14図　包含層出土遺物実測図(1)（縮尺３分の１）…… 22
第15図　包含層出土遺物実測図(2)（縮尺３分の１）…… 23
第16図　梯川中流域における９～11世紀の遺跡分布図（縮尺50,000分の１）…… 25
第17図　調査区位置図 …… 27
第18図　調査区平面図（縮尺150分の１）…… 28
第19図　調査区平面図・土層断面図（縮尺150分の１・60分の１）…… 29
第20図　出土遺物実測図（縮尺３分の１）…… 30

（第１～第16図は平成３年度調査、第17～第20図は平成４年度調査である。）

表　目　次

頁

第１表　周辺の遺跡地名表 …… 5
第２表　梯川中流域における７～11世紀の遺跡の動向 …… 25

例　　言

1　本書は石川県小松市軽海町に所在する軽海西芳寺遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は石川県土木部道路建設課施行のふるさと支援道路整備事業（主要地方道小松・下吉野線道路改良工事）に係るもので、同課の依頼により石川県立埋蔵文化財センターが小松土木事務所と協議して実施した。調査に係る費用は同課が負担した。

3　発掘調査は平成３年度と同４年度の２次にわたって実施した。期間および面積は次のとおりである。

　第１次調査　平成３年11月６日～同年12月20日　面積　600㎡

　第２次調査　平成４年10月19日～同年11月13日　面積　600㎡

4　発掘調査にあたっては、小松市荒木田町の有志の参加・協力を得た。

5　挿図中の方位は、指示のないもの以外は真北である。断面図の水準線に付した数字はすべて標高で、単位はメートルである。

6　写真図版の遺物に付した番号は挿図の番号に一致する。

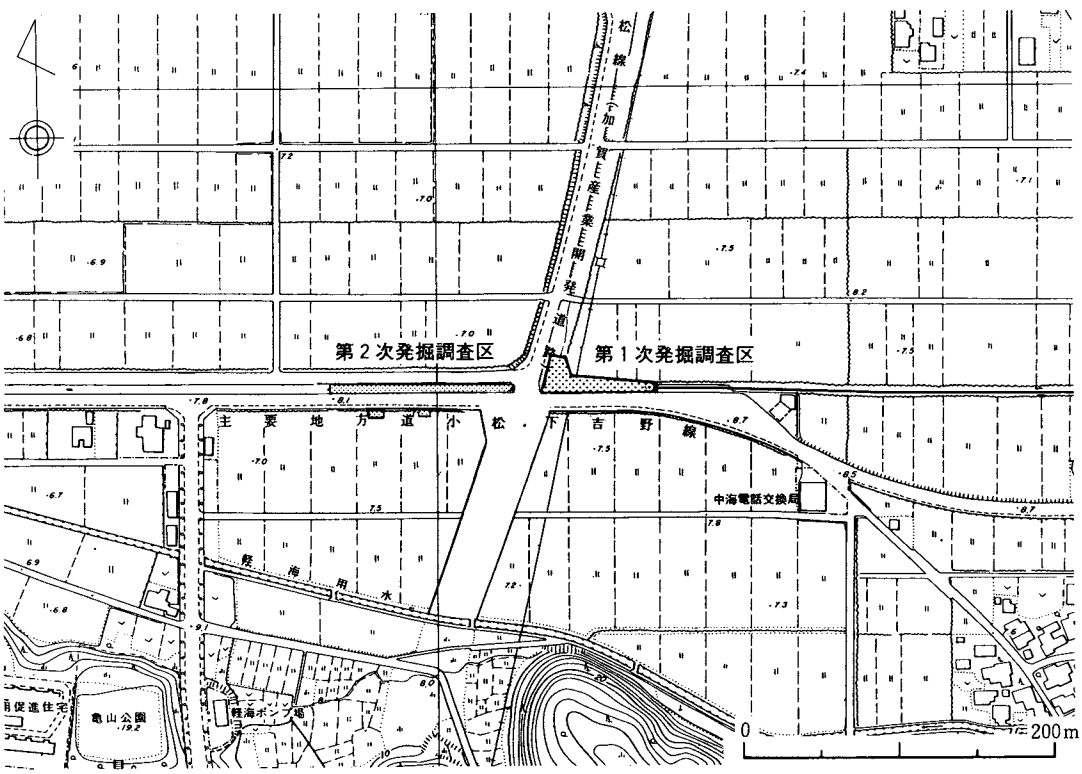
7　本書の執筆は第１章～第３章を石川県立埋蔵文化財センター主事三浦ゆかりが、第４章を同主事柿田祐司が担当し、編集は三浦が行った。

8　調査によって得られた資料は石川県立埋蔵文化財センターが保管している。

第1章　序　　説

本遺跡が所在する軽海町の北部には、主要地方道小松・下吉野線と並行して北陸鉄道小松線が走っていたが、昭和61年に廃線となった。そのため、鉄道の旧線路敷を道路に改良する工事が実施されることになり、平成3年度から平成4年度にかけて、ふるさと支援道路整備の一環としての観光幹線軸魅力アップ事業が進められた。本事業は、小松市軽海町から同八幡にかけての延長1,100mにわたって幅員約30mの道路を建設しようとするもので、小松土木事務所が担当している。事業実施箇所が軽海西芳寺遺跡の範囲内にあることから、当センターが道路建設課から依頼をうけて平成3年5月13日に分布調査を実施した。その結果、遺跡が加賀産業道路の交差点から東に約80m、西に約120mの広がりをもつことが確認され、発掘調査が必要であることが判明した。この結果をふまえて、小松土木事務所と協議のうえ、平成3年度は加賀産業道路との交差点から東側部分の面積約600㎡を、平成4年度は西側部分の面積約600㎡を発掘調査することにした。

ところで本遺跡の最初の発見は昭和57年に遡る。小松・下吉野線と交差する主要地方道金沢・小松線改良事業（加賀産業道路）に伴う分布調査で、弥生時代から中世にかけての複合遺跡であることが明らかになり、昭和58年度から昭和59年度にかけて当センターが、現在の軽海交差点から南側の丘陵部分約6,100㎡の発掘調査を行っている。その結果、縄文時代の炉跡、土坑をはじめ、古墳時代の溝、奈良・平安時代の掘立柱建物跡、中世の掘立柱建物跡や井戸などを検出した。



第1図　軽海西芳寺遺跡の発掘調査箇所　　1／5,000

第１次調査の風景

さて今回の第１次調査は、平成３年11月６日より開始し、同年12月20日に終了した。調査の結果、古墳時代後期の掘立柱建物跡をはじめ、平安時代の土坑や溝、中・近世の土坑などを検出した。その他、ピットや包含層から縄文土器が１点、弥生土器が数点出土している。

第２次調査は、平成４年10月19日より開始し、同年11月13日に終了した。検出した遺構・遺物は、古代と思われる溝４条、性格不明のピット群、弥生時代後期末～古代の土器等である。

遺物整理は、洗浄から遺物実測図浄書までの大部分と、遺構図の一部浄書を社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託した。遺物の実測・浄書の一部は池村ひとみ、越田順子、山本澄子、柿田祐司、三浦ゆかりが、遺構図の浄書は柿田、三浦が担当した。調査関係者は次のとおりである。

平成３年度調査担当者　石川県立埋蔵文化財センター主事木立　雅朗、同三浦　ゆかり

調査協力者　岸本　弘　堂前与志男　南　他作　山田　茂　山西　政清
面　きよ子　面　浜子　北　貴代好　北出寿美子　堂前　幸子
西木戸君枝　西木戸みか　西田　時子　東出喜美枝　南　きみ
南　照子　南　マス子　四柳　正彦

平成４年度調査担当者　石川県立埋蔵文化財センター主事北野　博司、同柿田　祐司

調査補助員　的場　勝俊（富来町教育委員会・長期研修生）

調査協力者　堂前与志男　中西　明　南　他作　池本　ちか　面　きよ子
面　鈴　川端　芳子　北　貴代好　北出寿美子　西木戸みか
東出喜美枝　藤田美和子　南　きみ　南　マス子　山西　ゆき

第２章　軽海西芳寺遺跡の環境

第１節　位置と地理的環境（第１・２・３・４図、図版第１）

軽海西芳寺遺跡は、小松市軽海町に所在する。軽海町は、梯川が、支流の滓上川を合わせて大きく西へ湾曲する中流左岸に位置する。梯川は大日山に連なる鈴ヶ岳に源を発し、能美山地を北流し、金野町で郷谷川、軽海町で滓上川と合流する。その後、西に進路を変え、沖積平野を形成しながら仏大寺川、鍋谷川、八丁川などを合わせ、小松市安宅町で日本海に注ぐ。下流域では、潟埋積平野を主体とする小松・江沼平野が形成され、かつては潟湖である加賀三湖が存在したが、現在は今江潟が干拓により消滅し、木場潟と柴山潟も著しく縮小した。

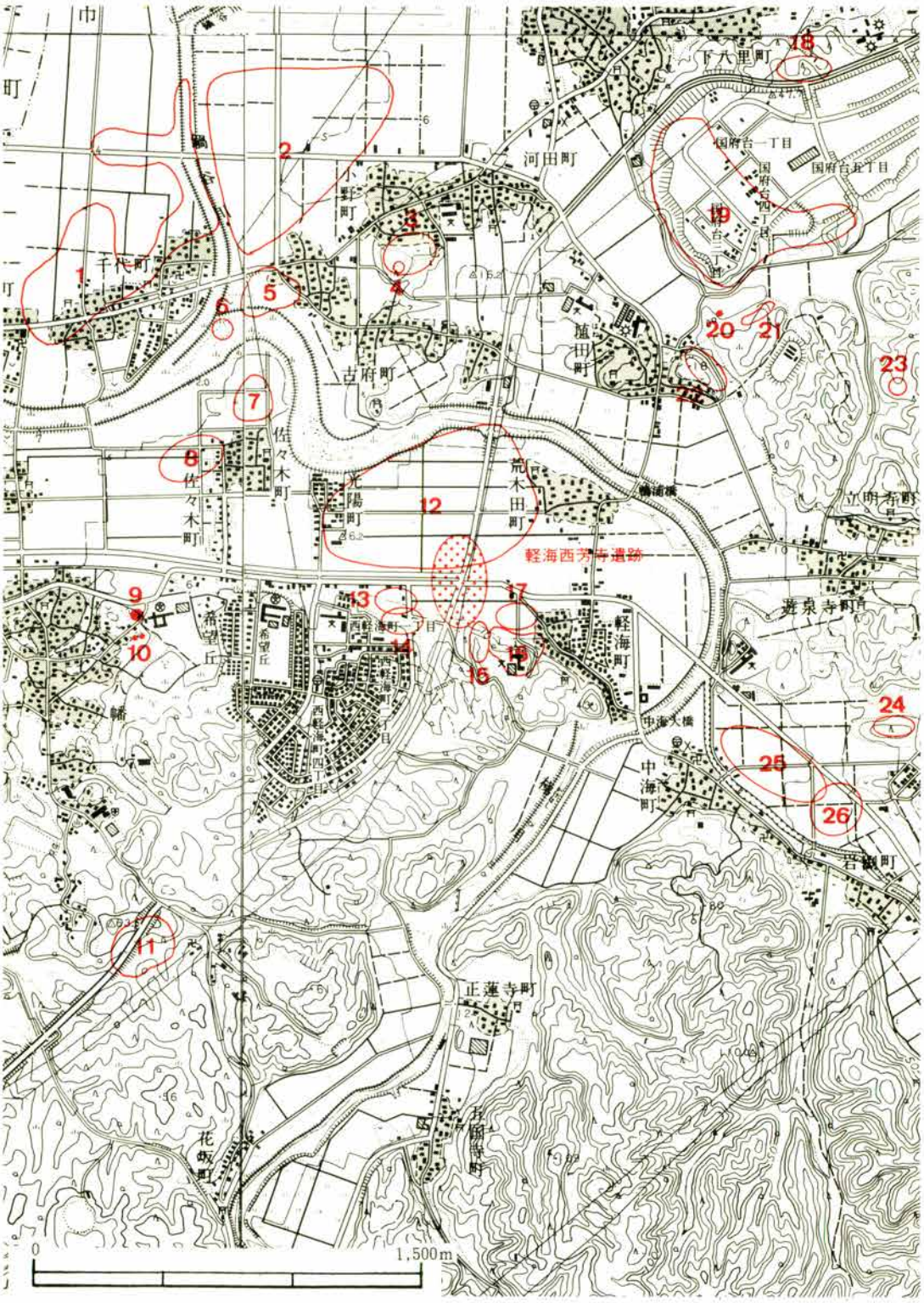
第２図　小松市位置図
１／3,000,000

本遺跡は、梯川中流域に形成された沖積平野の一角に位置する。東は能美丘陵とその背後に能美山地が遠望でき、北と西には沖積平野が広がる。南は小松東部丘陵が連なり、その丘陵裾部を軽海用水が西流する。軽海用水は梯川を取入口として明治25年に開削され、梯川中流左岸地域の水田を潤してきた。しかし、昭和43年頃より尾小屋鉱山の廃坑から梯川に流出したカドミウムによる土壌汚染が問題となり、昭和52年度から公害防除特別事業が実施され、梯川中流左岸地域がその対象となった。梯川中流左岸地域は遺跡の密集地域であることから、工事の影響を直接受ける遺跡が多く、発掘調査を余儀なくされた。昭和53年度から昭和63年度にかけて、78,600㎡にも及ぶ９遺跡の発掘調査が行われた[1]。

さて、本遺跡の東方には梯川が西流するが、明治初年に編纂された『皇国地誌』によると、「梯川東辺ヲ環流スルヲ以テ頗ル漕運ニ便ナリ。」とあり、梯川が古くから重要な物資輸送路として機能していたことがうかがえる。現在の軽海町の東南にある河原橋の下が終点で、ここで物資を集散し、梯川下流域の集落や日本海の沿岸地域に運んだようである。中世軽海郷の本郷に市が所在していたという記録もあり[2]、本遺跡周辺の地域は、流通経済において重要な役割を果していたものと思われる。

第２節　歴史的環境（第３図、第１表）

梯川中流左岸の遺跡で、本遺跡が最も早く形成をみる。当埋蔵文化財センターによる昭和59年の発掘調査では、小松東部丘陵の裾部から縄文時代中期の石組炉をもつ竪穴住居跡が１基と、多



第３図　軽海西芳寺遺跡と周辺の遺跡分布図　　1／25,000

第１表　周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	現況	種別	時代	備考
1	千代オオキダ遺跡	小松市千代町	田	散布地	弥生～中世	墨書土器・瓦出土
2	古府しのまち遺跡	〃　古府町・千代町	〃	集落跡	古墳～平安	墨書土器出土
3	十九堂山遺跡	〃　古府町	田・畑	寺院跡	平安・中世	軒平瓦・丸瓦・平瓦出土
4	十九堂山中世墓群	〃　〃	畑	墳墓	中世	五輪塔・宝篋印塔出土
5	古府遺跡	〃　〃	田・宅地	集落跡	平安中期	軒平瓦・丸瓦・平瓦出土
6	フドンド遺跡	〃　〃	田	散布地	平安	山吹双雀鏡出土
7	佐々木アサバタケ遺跡	〃　佐々木町	田・畑	集落跡	弥生～中世	軒平瓦・丸瓦・平瓦出土
8	佐々木ノテウラ遺跡	〃　〃	田	〃	〃	墨書土器33点出土
9	八幡古墳群	〃　八幡町	宅地・畑	古墳	古墳後期	6基
10	八幡遺跡	〃　〃	畑・道路	集落跡	弥生～古墳・近世	若杉焼の窯跡を検出
11	浄水寺跡	〃　〃	山林・道路	寺跡	奈良～中世	墨書土器約1,200点出土
12	荒木田遺跡	〃　荒木田町	田・道路	散布地	弥生～中世	墨書土器・石帯出土
13	軽海遺跡	〃　西軽海町	田	〃	弥生～近世	墨書土器出土
14	亀山玉造遺跡	〃　軽海町	宅地・公園	集落跡	古墳前期	碧玉原石出土
15	軽海中世墓群	〃　〃	山林	墳墓	鎌倉末～室町	五輪塔・陶質土器出土
16	軽海廃寺	〃　〃	雑木林	寺院跡	平安後期	軒平瓦・丸瓦・平瓦出土
17	西芳寺遺跡	〃　〃	田	〃	平安・中世	丸瓦・平瓦出土
18	下八里横穴群	〃　下八里町	道路法面	横穴墓	中世	4基以上
19	河田山古墳群	〃　国府台	宅地・公園	古墳	古墳前～後期	総数61基
20	御菩提所古墳	〃　埴田町	畑	〃	古墳	円墳
21	埴田山古墳群	〃　〃	山林	〃	〃	円墳２基
22	埴田後山古墳群	〃　〃	畑	〃	〃	円墳４基
23	里川Ｅ遺跡	〃　里川町	ゴルフ場	寺院跡	平安	礎石建物を検出
24	長寛寺中世墓跡	〃　中海町	畑	墳墓	室町	五輪塔出土
25	中海Ｂ遺跡	〃　〃	田	集落跡	古墳～中世	
26	中海遺跡	〃　〃	〃	〃	縄文中期	

数の土坑群が検出されている。土坑群から硬玉製垂飾などが出土していることから、墓地跡と推定されている。また、同じ縄文時代中期の遺跡に中海遺跡がある。昭和56年の当センターによる調査では、中期中葉の石囲炉が検出され、中期後葉の土器が大量に出土した。

続く弥生時代前・中期の遺跡は稀薄であるが、後期になると本遺跡をはじめ、軽海、千代オオキダ、古府しのまち、佐々木ノテウラ、佐々木アサバタケ、八幡など多くの遺跡が出現し、梯川

中流域での集落の形成が本格的に始まる。

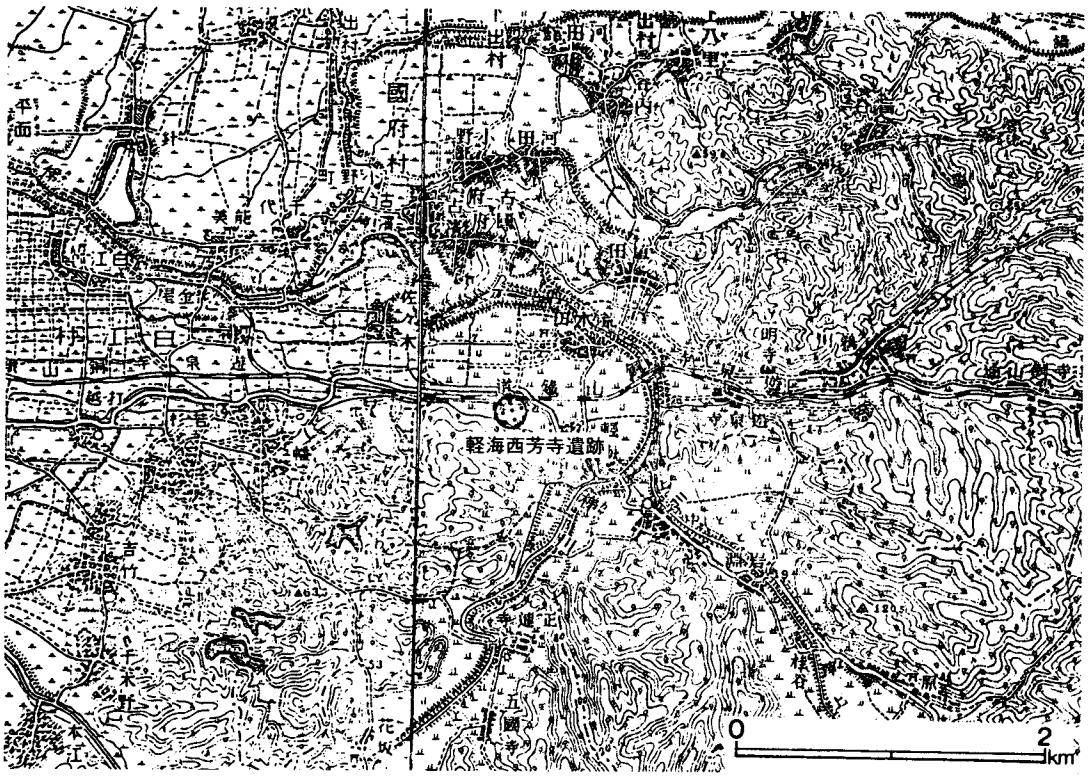
古墳時代に入ると、河田山古墳群をはじめ、埴田後山、埴田山、ブッショウジ山、八幡などの各古墳群や、後山無常堂古墳、御菩提所古墳などの古墳が築造される。河田山古墳群は、梯川右岸の丘陵上に存在する総数61基からなる大規模な古墳群である。墳丘の形態は、前方後方墳、円墳、方墳、前方後円墳からなり、築造時期は前期から後期にわたる。なかでも第12号墳は、アーチ形の天井部をもつ切石積横穴式石室を有する方墳で、類例のない終末期古墳として注目される[3]。八幡古墳群では6基の古墳が確認されており、1・2号墳からは埋葬施設が発見されている。1号墳は、7世紀初頭の築造と推定されている円墳で、切石積横穴式石室を有する。2号墳は6世紀末頃の円墳で、木芯粘土室が残る。6号墳である八幡大塚古墳の墳丘部からは、再興九谷である若杉焼の窯跡が発見されている。

奈良時代には本遺跡をはじめ、軽海、千代オオキダ、古府しのまち、佐々木ノテウラなどの各遺跡が弥生時代後期から継続して営まれる。千代オオキダ遺跡は、弥生時代後期から中世にかけての複合遺跡で、7世紀後半から8世紀前半と推定される掘立柱建物跡が検出されている。佐々木ノテウラ遺跡も弥生時代後期から中世にかけての複合遺跡で、7世紀前半から8世紀前半の掘立柱建物跡や倉庫跡などが検出されている。

ところで本遺跡の所在する軽海は、弘仁14年（823）の加賀立国をもって加賀国江沼郡の所属となるが、ほどなく江沼郡の北部が能美郡として割かれ、加賀国能美郡の所属となる。10世紀前半に編纂された『和名類聚抄』には、能美郡に軽海・野身・山上・山下・兎橋の五郷が存在したことが記されており、現在の軽海町は軽海郷の遺称地と考えられている。その郷域は、軽海町周辺の平野部と、梯川上流域の山間部からなり、本遺跡を含む平野部は、軽海郷の中枢域であったものと推定される[4]。

一方、梯川の右岸に立地する古府台地は、従来から加賀国府の所在地と推定されている。また台地の西北にある十九堂山遺跡は、加賀国分寺の候補地とされているが[5]、確証はない。近年、大東急記念文庫本『和名類聚抄』が紹介されるに至って国府移転説が提出されたが[6]、9世紀前半における遺跡の動態などからも、国府を見直す考えが出されつつある[7]。この他古府台地周辺には、古府、古府シマ、フドンドなどの平安時代前期の遺跡が存在する。また同期の梯川右岸には千代オオキダ遺跡、左岸には本遺跡や荒木田遺跡がある。千代オオキダ遺跡では、9世紀前半の須恵器が多く出土している。荒木田遺跡では、8世紀後半から10世紀前半頃の掘立柱建物跡や、8世紀後半から9世紀後半頃の水場遺構を検出しており、帯金具や石帯、墨書土器が出土している。

平安時代中期には、佐々木ノテウラや浄水寺の遺跡が盛期を迎える。佐々木ノテウラで検出された10世紀前半頃とみられる2棟の掘立柱建物跡は、溝や柵によって画されており、居住域としての屋敷地と推定されている。また、屋敷地内には井戸や土坑群が存在し、遺構や包含層からは「㐂」と墨書された須恵器が多く出土している。その出土のあり方から、建物群移動の際の一括投棄の所産と考えられており、「㐂」の文字は住人の祭祀に関わるものと推定されている。浄水寺跡は、古代から中世にかけて営まれた寺院跡で、伝承が発掘調査によって裏づけられた稀少な例である。浄水寺は、8世紀後半頃から断続的に宗教活動を開始し、10世紀後半頃には各整地面に



第４図　軽海西芳寺遺跡周辺の地形図　　1／50,000

掘立柱建物を計画的に配置し、寺院としての活動を本格化させたことが明らかになった。また、土器を大量に投棄した大溝からは、寺院名を知る手がかりとなった「浄水寺」の墨書土器を始めとして、多量の墨書土器が出土しており、当時の寺院内における宗教活動の一端をうかがうことができる。「浄水」という地名は、水霊信仰に由来するものと考えられている[8]ことから、浄水寺は雨乞いの役割も担っていたものと思われる。また、承和年間（834～847）に起こった大旱害による飢饉が、加賀国分寺の設置の理由であることから浄水寺の国分寺との関連が推測されている[9]。

平安時代後期には、白山宮加賀馬場中宮の末寺である中宮八院[10]が成立するが、『白山之記』によると、八院のうち隆明寺を除く七ヶ寺が能美郡軽海郷に所在したと記されている。中宮八院の一つである長寛寺は、その地名がのこることから中海Ｂ遺跡周辺に推定されている。発掘調査では12世紀中葉頃の遺物が出土しているが、寺院跡と確定できるような遺構や遺物は検出されていない。また涌泉寺は、現在の遊泉寺町に伝承地があり、安元事件の舞台となったことで知られている。安元事件は、白山中宮三社八院の衆徒らによる反国守闘争に端を発するが、闘争の主体となったのは、堂衆・神人集団に組織された軽海郷の上層百姓であったと推測されている[11]。また『源平盛衰記』によれば、「白山中宮ノ末寺ニ涌泉寺ト云寺アリ。国司の庁ヨリ程近キ所ナリ。」とあり、安元２年（1176）頃には涌泉寺と国府が近接していたことがうかがえる。その他、隆明寺・善興寺・松谷寺・護国寺・昌隆寺の位置が地名から推定されているが、その比定には検討を要する。

中世の軽海郷は、古代の郷域を継承し、嘉暦4年（1329）には武蔵国金沢称名寺の所領となる。以後康暦2年（1380）までの約50年間、称名寺が軽海郷を支配した。暦応3年（1340）の『軽海郷年貢等進未注進状』によると、軽海郷は本郷と大野・河内から編成されており、本郷は里百姓、大野・河内は山百姓と区別されていたことが明らかになっている。軽海郷の打ち渡しの際に、称名寺は前地頭一族の抵抗にあい、領内の支配は困難な状況にあった。こうした状況のもと、称名寺は軽海郷の入部にあたり、前地頭一族の墓所を移動させている。

ところで中世における本遺跡周辺の遺跡には、佐々木アサバタケ、佐々木ノテウラ、千代オオキダなどがある。佐々木アサバタケ遺跡からは、13～16世紀の掘立柱建物跡や井戸、竪穴状遺構などが検出されている。井戸覆土の植物遺体の同定が試みられ、中世集落における農業の一端が明らかになっている。佐々木ノテウラ遺跡からは、14～15世紀の陶磁器が出土している。千代オオキダ遺跡からは、昭和62年度の調査で13～15世紀の遺物が出土しており、平成元年度の調査では15世紀代の中世陶器が出土している。

16世紀に入ると、軽海郷内には一向一揆の勢力が浸透し始め、本願寺に所領の保証を求めるようになる。梯川の支流大杉谷川の流域にある波佐谷松岡寺は、賀州三ヶ寺の一つとして知られるが、開創は蓮如の三男北隣坊蓮綱であることから、本願寺一家衆として他の二ヶ寺とともに加賀の本願寺教団のかなめとなり、強大な権力を誇った。現在の波佐谷集落の南方の丘陵上に広がる波谷城跡の一角に、寺跡が確認されている。

註

(1) 採土地となった那谷桃の木山・那谷金比羅山などの窯跡群や、土地改良事業により影響を受けた漆町・白江梯川・佐々木ノテウラ・佐々木アサバタケ・軽海・西芳寺・吉竹の各遺跡がある。

(2) 『天文日記』天文7年11月14日条に、前年夏から軽海郷市が停止されている状況にあることがうかがえる。

(3) 『石川考古』第176号　石川考古学研究会　1987　金沢。

(4) 福島金治「金沢称名寺領加賀国軽海郷について―鎌倉期を中心にして―」『中世史論攷』　文献出版　1987　東京。

(5) 吉岡康暢「加賀」『新修国分寺の研究』第三巻　吉川弘文館　1991　東京。

(6) 木下良「大東急記念文庫本『和名類聚抄』と前田本・黒川本『色葉字類抄』に見る加賀国府と越中国府」『北陸都市史学会報』四　北陸都市史学会　1982　金沢。

(7) 北野博司編『佐々木ノテウラ遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1986　金沢。

(8) 櫻井甚一「福水遺跡と浄水寺遺跡出土の仏具」『加能史料』会報第2号　加能史料編纂委員会　1985　金沢。

(9) 永井肇「古代の根上町～奈良・平安時代を中心に～」『根上郷土史研究』創刊号　根上町郷土史研究会　1993　石川県根上町。

(10) 『白山之記』によれば、護国寺・昌隆寺・松谷寺・蓮花寺・善興寺・長寛寺・涌泉寺・隆明寺の八ヶ寺をいう。

(11) 浅香年木「堂衆・神人集団の反権門闘争」『治承・寿永の内乱論序説』　法政大学出版局　1981　東京。

参考文献（五十音順）

浅香年木・田川捷一他『角川日本地名大辞典』17　石川県　角川書店　1981　東京。
紹野義夫編『石川県の環境地質』　石川県　1977　金沢。
永井肇　「第一編　古代」『新修根上町史』　史料編上　根上町役場　1993　石川県根上町。
福島金治「金沢称名寺領加賀国軽海郷について―南北朝期を中心にして―」『東アジアと日本』歴史編　吉川弘文館　1987　東京。
若林喜三郎・高澤裕一監修『石川県の地名』日本歴史地名大系17　平凡社　1991　東京。

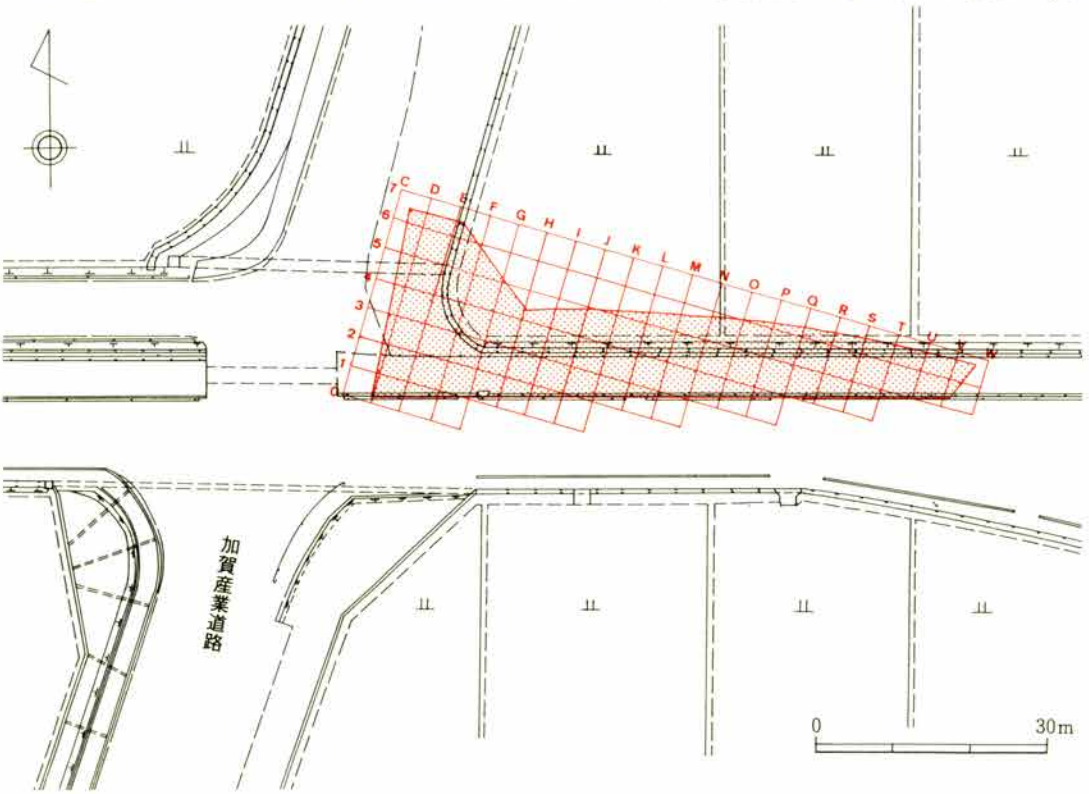
第３章　平成３年度調査の遺構と遺物

第１節　概　要

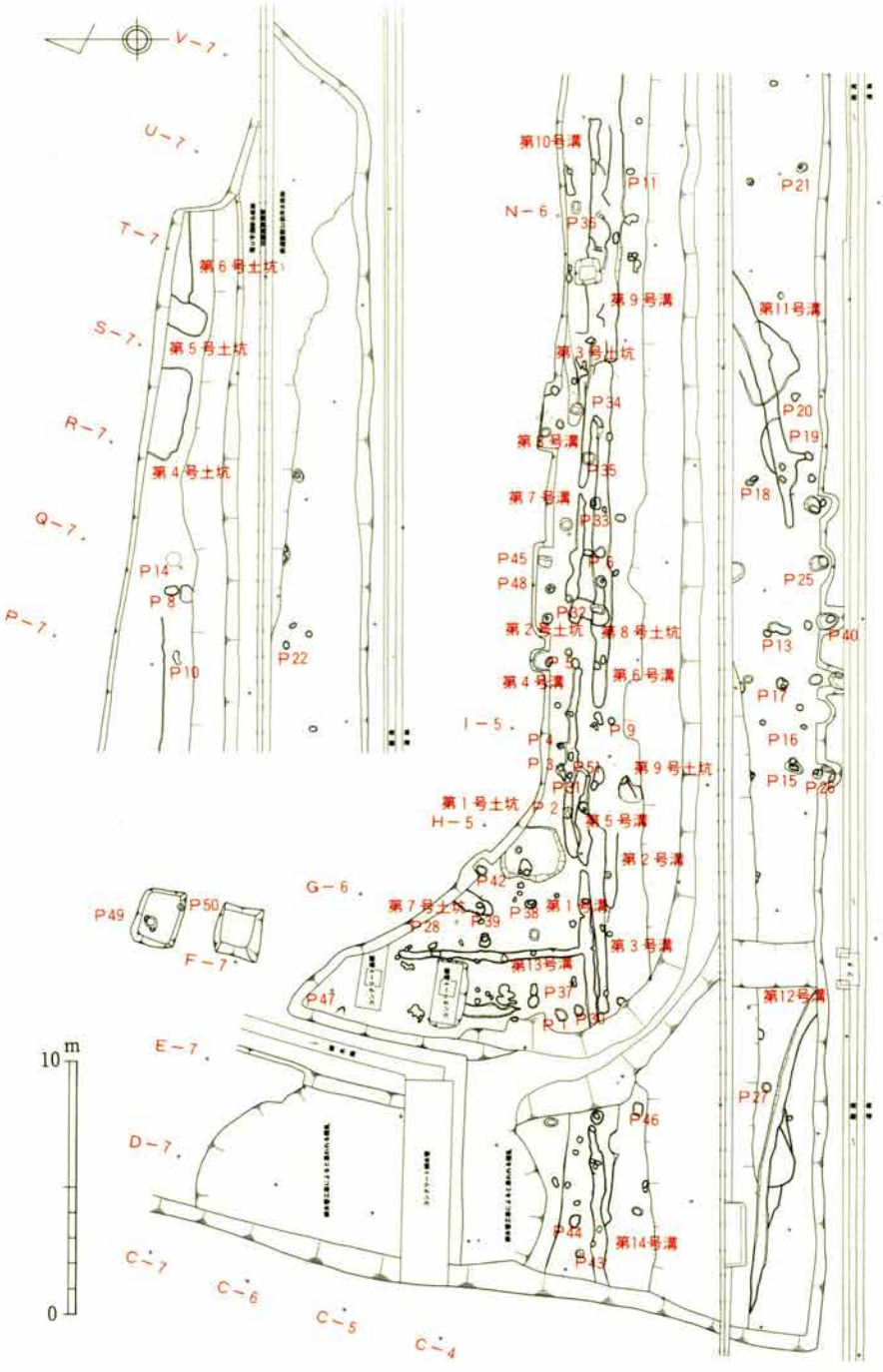
軽海西芳寺遺跡は、軽海集落の中心部より北西約500ｍの微高地上に立地し、標高は約７ｍを測る。分布調査の結果、遺跡の範囲は東西約200ｍ、南北約350ｍの広がりをもつことが明らかになった。

第１次調査区域は、加賀産業道路と県道小松・下吉野線が交差する北東角の地点で、北陸鉄道小松線の線路敷部分と、それに北接する水田を調査の対象としている。調査面積は約600㎡である。調査区の割付は４ｍ×４ｍのグリッドとし、東西方向にアルファベット、南北方向にアラビア数字を付し、その交点の南西をＤ１区、Ｄ２区などと呼称した。南北軸は加賀産業道路のセンターラインに並行し、真北に対しては約15度東にふれている。

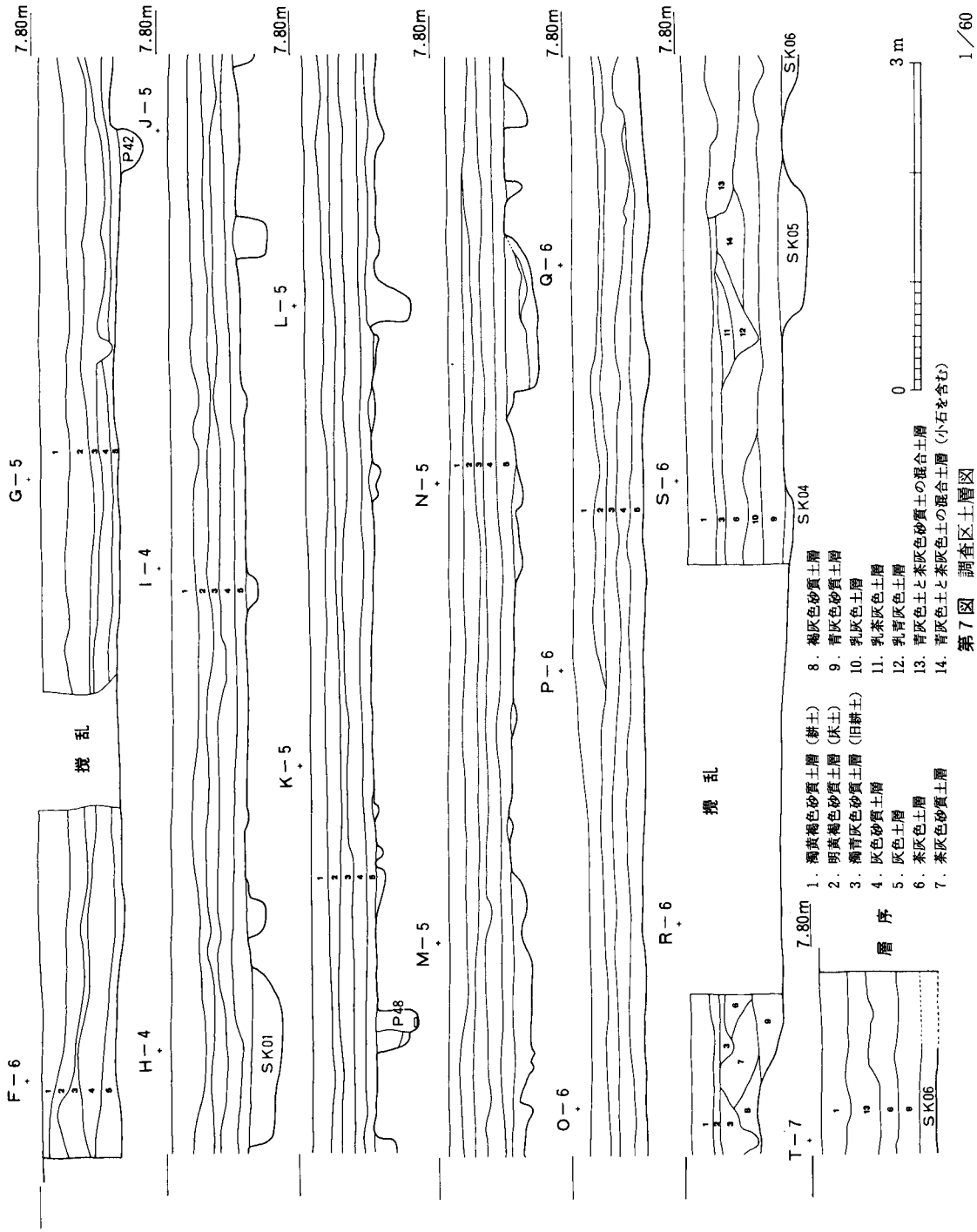
次に基本的層序は、大きく５層に分けられる。第１層は耕土層、第２層は第１層の床土で、カドミウムに汚染された土壌を改良するために入れ替えた客土である。第３層は旧耕土層、第４層は弱粘性の灰色砂質土層である。第５層は第４層よりもやや粘性が強い灰色土層で、奈良時代から平安時代にかけての遺物を含む。この下が遺構面であり、遺構掘り込み面となっている。水田面から遺構面までは70～80㎝を測る。地山は黄灰色シルト層で赤褐色粒を多く含み、粘性が強い。



第５図　調査区区割図　　1／1,000



第6図　調査区全体図　　1／300


7.80m
F－6
G－5
H－4
I－4
J－5
K－5
L－5
M－5
N－5
O－6
P－6
Q－6
R－6
S－6
T－7
P42
P48
SK01
SK04
SK05
SK06
攪乱
0
3 m
1／60
層序
1．濁黄褐色砂質土層（耕土）
2．明黄褐色砂質土層（床土）
3．濁青灰色砂質土層（旧耕土）
4．灰色砂質土層
5．灰色土層
6．茶灰色土層
7．茶灰色砂質土層
8．褐灰色砂質土層
9．青灰色砂質土層
10．乳灰色土層
11．乳茶灰色土層
12．乳青灰色土層
13．青灰色土と茶灰色砂質土の混合土層
14．青灰色土と茶灰色土の混合土層（小石を含む）

第７図　調査区土層図

遺構は、掘立柱建物跡、土坑、溝状遺構、ピットを検出したが、調査面積が少ないことや、調査区中央に幅約４ｍの近世の溝が掘られていたことなどから、遺構の全容をうかがえるものは少ない。遺物は、Ｆ３・４区からＧ３・４区にかけての包含層から多く出土している。また調査区全域にわたって溝状遺構が14条みられた。

なおＦ４・５区内にある看板を、Ｆ６・７区の地点に移設する立ち合い調査を行い、ピットを検出した。ピット内や包含層からは須恵器、土師器が出土したが、細片のため実測できたものは少なく、時期の特定はできなかった。

第２節　各　説

１　掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡（第８図）

Ｅ２・３区～Ｆ２・３区に位置する。東西柱列の間が近世の溝によって切られているが、東西２間（4.2m）×南北２間（3.4m）以上の掘立柱建物跡を検出した。主軸方向は、真北に対して８度西へふれている。柱間は南北列が1.7ｍである。柱穴掘り方は、長径35～55cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは20～40cmを測り、覆土は黒色砂質土層である。

出土遺物には土師器があるが、細片のため図化できなかった。

第２号掘立柱建物跡（第８図、第11図１～３、図版第５・第８）

Ｊ４～Ｋ４区に位置する。第６号溝と第８号溝の下層から東西２間（3.8m）×南北１間（2.10m）以上の掘立柱建物跡を検出したが、北側が調査区外のため全体規模は不明である。主軸方向は真北に対し81度東にふれている。柱間は桁行が西より2.0ｍ・1.8ｍと不揃いである。柱穴掘り方は径45cm前後でほぼ円形を呈する。検出面からの深さは25～35cmを測り、覆土は黒色砂質土層である。

出土遺物には、須恵器、土師器がある。１はＰ35から出土した須恵器の杯蓋で、口径11.6cm、器高3.6cmを測る。天井部から肩の一部にかけロクロケズリを施す。２はＰ45から出土した須恵器の杯蓋で、口径10.8cmを測る。３はＰ33から出土した土師器の椀である。出土遺物の時期は、７世紀後半頃とみられる[1]。

第３号掘立柱建物跡（第８図、第11図４、図版第５）

Ｊ２～Ｌ２区に位置する。南側が調査区外のため全体規模は不明であるが、東西３間（7.0ｍ）の柱列を検出した。建物は東西棟と思われ、主軸方向が真北に対し82度東にふれている。柱間は2.30ｍである。柱穴掘り方は長径70～90cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは40～50cmを測る。各柱穴の底には深さ約20cmの小ピットを有する。覆土は黒色砂質土層である。

出土遺物には、須恵器、土師器がある。４はＰ25から出土した須恵器の有台杯である。時期は７世紀後半頃とみられる。

第８図　掘立柱建物跡実測図

2　土　坑

第１号土坑（第９図、第11図５～17、図版第８）

Ｇ４～Ｈ４区に位置し、北東隅は調査区外に延びている。長径260cm、短径220cmの隅丸方形を呈し、深さは25cmを測る。覆土は第１層が暗灰色砂質土層で炭化物を含み、第２層が淡黒色砂質土層からなる。

出土遺物には、須恵器、土師器、土錘がある。５～９は須恵器の杯蓋である。７は口径17.2cm、９は口径16.2cmを測る。10～14は須恵器の無台杯である。10は口径13.3cm、底径9.7cm、器高3.7cmを測る。底部はヘラケズリのあと、粗くナデ調整を施している。15は須恵器の有台杯で、口径15.0cm、器高3.9cm、底径10.6cmを測る。底部はヘラケズリのあと粗くナデ調整を施している。５～７の時期は７世紀後半頃、９は９世紀後半頃、10は７世紀末葉頃、15は８世紀初頭とみられる。16･17は単孔の管状土錘である。16は長さ５cm、胴部最大径2.1cm、孔径0.8cmを測る。17は長さ3.9cm、胴部最大径1.8cm、孔径0.6cmを測る。

第２号土坑（第11図18）

Ｊ４区に位置し、第６号溝に切られる。規模は不明である。深さは約５cmを測り、覆土は黒色砂質土層である。

出土遺物には須恵器、土師器がある。18は須恵器の杯蓋である。

第３号土坑（第11図19～21）

Ｌ５区に位置し、規模は不明である。深さは約10cmを測り、覆土は黒色砂質土層である。

出土遺物には須恵器、土師器がある。19は須恵器の杯蓋、20は須恵器の有台杯、21は須恵器の甕の口縁部である。20の時期は、８世紀後半頃とみられる。

第４号土坑（第９図、第11図22）

Ｒ６区に位置し、北側は調査区外に延びている。長径360cm、短径120cm以上の隅丸長方形を呈し、深さは約８cmを測る。覆土は暗青灰色砂質土層である。

出土遺物には、須恵器、加賀焼、染付がある。22は加賀焼で、押印から那谷コテンノウダニ窯のⅡ類に分類される[2]。13世紀後半頃のものとみられる。

第５号土坑（第９図）

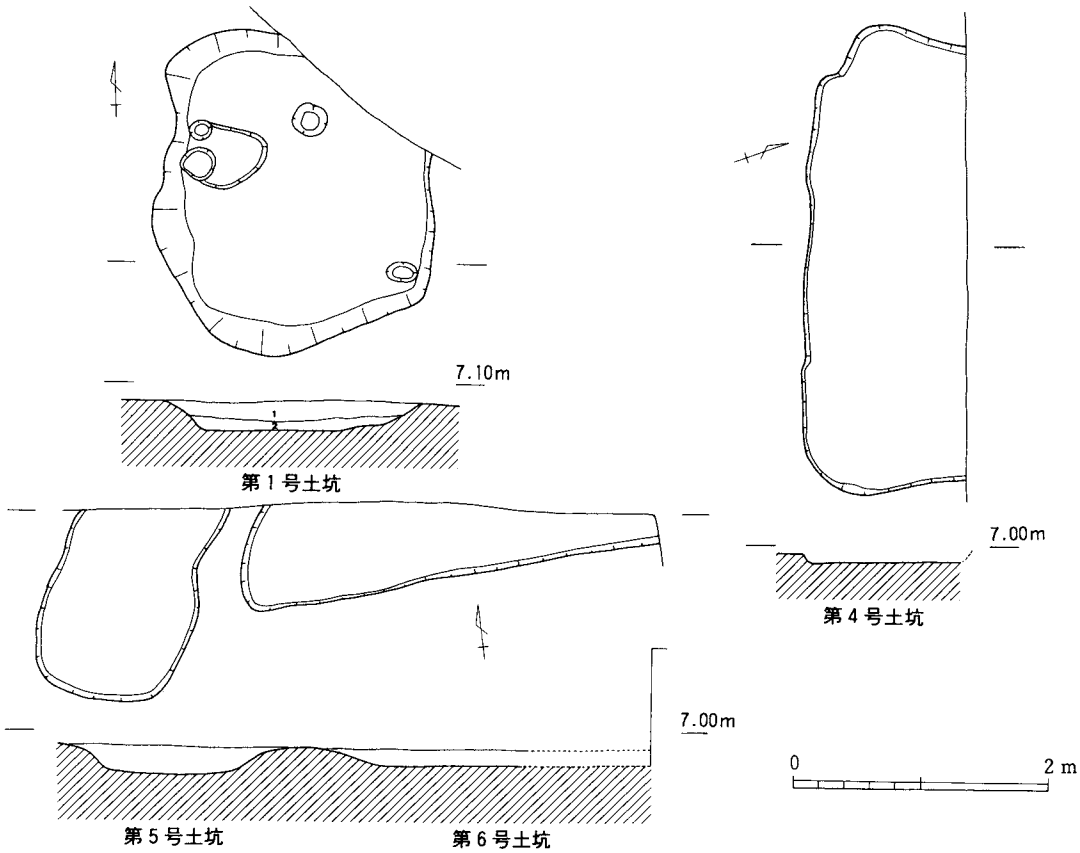
Ｓ６区に位置する。北側は調査区外に延びており、東側は第６号土坑を切っている。長径150cm以上、短径120cmの隅丸長方形を呈し、深さ16cmを測る。覆土は乳灰色砂質土層である。

出土遺物には唐津系陶器の擂鉢があるが、細片のため図化できなかった。17世紀代のものとみられる[3]。

第６号土坑（第９図）

Ｓ６～Ｔ６区に位置する。北側は調査区外に延びており、西側は第５号土坑に切られている。長径330cm以上、短径80cm以上の不整形を呈し、深さ14cmを測る。覆土は青灰色砂質土層で、暗青灰色シルト粒をブロック状に含む。

出土遺物には、須恵器、土師器があるが、細片のため図化できなかった。



第９図　土坑実測図　　1／60

第７号土坑

Ｇ４～Ｇ５区に位置し、北東隅は調査区外に延びている。長径150cm以上、短径75cmの不整形を呈し、深さ10cmを測る。底には径50cm、深さ20cmのピットを有する。覆土は第１層は暗灰色砂質土層で、白灰色シルトをブロック状に含む。第２層は淡黒色砂質土層で、白灰色シルト粒を含む。第３層は白灰色砂質土層で、暗灰色シルト粒を含む。

出土遺物には、須恵器、土師器があるが、細片のため図化できなかった。

第８号土坑

Ｊ４区に位置する。第６号溝の下層遺構で、規模は不明である。深さは10cmを測り、覆土は黒色砂質土層である。

出土遺物には、須恵器、土師器があるが、細片のため図化できなかった。

第９号土坑（第11図23）

Ｈ３区に位置し、規模は不明である。深さは15cmを測り、覆土は青灰色砂質土層である。

出土遺物には、須恵器、土師器がある。23は須恵器の有台椀である。時期は９世紀後半頃とみられる。

3　溝状遺構

14条の溝状遺構が検出されている。第１号溝～第10号溝、第14号溝は、東西方向に並走しており、いずれも底に小ピットを有する。深さも５～10cmと浅く、高低差もほとんどない。耕作に関係する溝であると思われる。

第１号溝（第11図24）

Ｆ３～Ｇ３区に位置する。長さ620cm、最大幅60cm、深さ５～10cmを測る。西側は近世の排水溝に切られ、北側は第13号溝と直交する。覆土は暗灰色砂質土層で、炭化物を含む。

出土遺物には、須恵器、土師器がある。24は須恵器の有台杯で、底径12cmを測る。時期は、８世紀の初頭頃とみられる。その他、細片だが９世紀代の須恵器が出土している。

第２号溝

Ｇ３～Ｈ３区に位置する。長さ300cm、幅50cm、深さ５cmを測る。東側は浅い落ち込みによって切られている。覆土は灰色砂質土層で、炭化物を含む。

出土遺物には、須恵器、土師器があるが、細片のため図化できなかった。

第３号溝

Ｆ３～Ｇ３区に位置する。長さ750cm、最大幅70cm、深さ５cmを測る。覆土は淡灰色砂質土層で、炭化物を含む。

出土遺物には、須恵器、土師器、灰釉陶器があるが、細片のため図化できなかった。

第４号溝（第11図25～27、図版第８）

Ｈ４～Ｉ４区に位置する。長さ750cm、深さ８cmを測る。覆土は暗灰色砂質土層である。

出土遺物には、須恵器、土師器がある。25･26は須恵器の杯蓋である。27は須恵器の甕の口縁部であり、口径25.6cmを測る。外面には自然釉が付着し、黒灰色を呈する。時期は８世紀代と推定される。その他、細片だが９世紀代の須恵器が出土している。

第５号溝（第12図28）

Ｈ４区に位置する。長さ350cm、最大幅50cm、深さ６cmを測る。覆土は暗灰色砂質土層である。

出土遺物には、須恵器、土師器がある。28は須恵器の杯蓋で、口径14.4cmを測る。時期は７世紀後半頃とみられる。その他、細片だが９世紀代の須恵器が出土している。

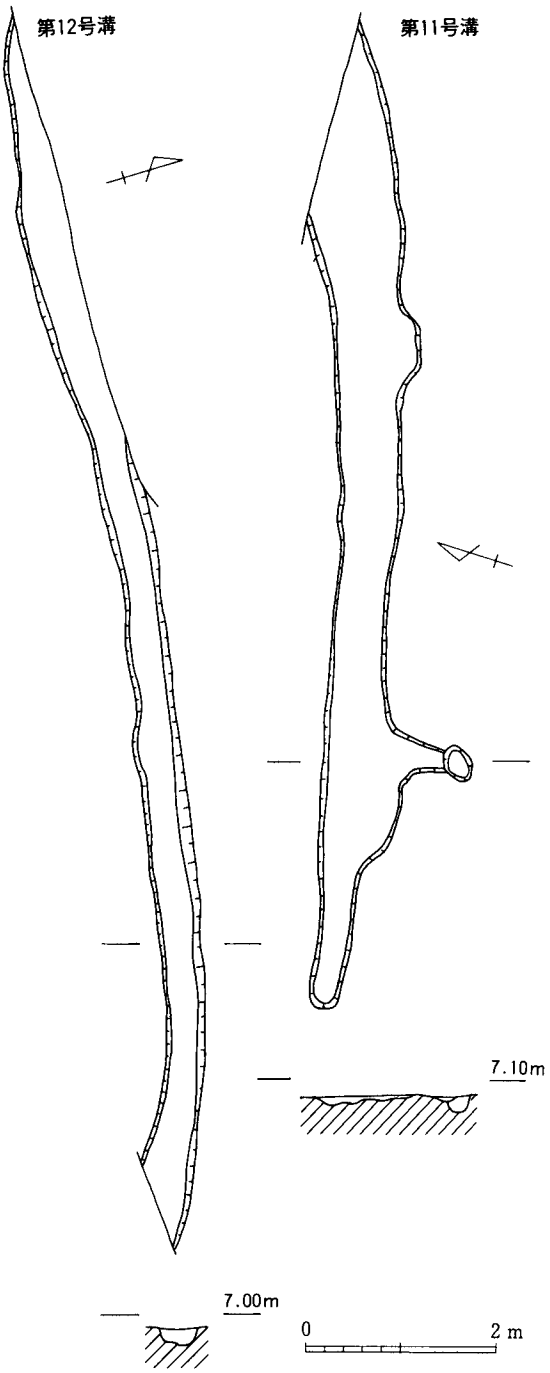
第６号溝（第12図29～33）

Ｉ４～Ｌ４区に位置する。長さ13.6m、最大幅0.8m、深さ５～10cmを測る。覆土は灰色砂質土層である。

出土遺物には、弥生土器、須恵器、土師器がある。29は弥生土器の高杯脚部で、底径16.2cmを測る。30は須恵器の無台杯、31は須恵器の高杯脚部である。32は須恵器の甕の口縁部で、口径13.1cmを測る。時期は10世紀前半頃とみられる。33は土師器の甑の把手である。

第７号溝

Ｊ４～Ｋ４区に位置する。長さ460cm、最大幅50cm、深さ５～10cmを測る。西側は第２号土坑を切っている。覆土は灰色砂質土層である。



第10図　溝状遺構実測図　　1／80

出土遺物には、須恵器、土師器があるが、細片のため図化できなかった。

第８号溝

Ｋ５～Ｌ５区に位置する。長さ270cm、幅30cm、深さ４cmを測る。東側で第６号溝と合流する。覆土は灰色土層で、炭化物を含む。

出土遺物には、須恵器と土師器があるが、細片のため図化できなかった。

第９号溝（第12図34、図版第８）

Ｌ５～Ｐ５区に位置し、規模は不明である。深さは10cmを測り、覆土は灰色砂質土層である。

出土遺物には、須恵器、土師器がある。34は須恵器の有台椀で、底径7.0cmを測る。外底部は回転糸切りである。時期は10世紀後半頃とみられる。

第10号溝

Ｍ５～Ｎ５区に位置し、規模は不明である。深さは10cmを測り、覆土は灰色砂質土層である。

出土遺物には、須恵器、土師器があるが、細片のため図化できなかった。

第11号溝（第10図、第12図35、図版第６）

Ｋ３～Ｍ３区に位置する。長さ10m、最大幅１mを測り、深さは２～５cmと浅い。溝底には高低差が認められなかった。北東方向に走る溝で、北東側は線路敷の擁壁によって切られている。覆土は黒色砂質土層で、灰色シルト粒を含む。

出土遺物には、須恵器、土師器がある。35は須恵器の高杯脚部で、底径11.4cmを測る。その他細片だが９世紀代の須恵器が出土している。

第12号溝（第10図、第12図36、図版第６）

Ｄ１～Ｇ１区に位置する。長さ13m、幅0.5m、深さ15～20cmを測る。溝底は北西側が低く、南東から北西への流路をもつ。南東側は調査区外に延び、北西側は線路敷の擁壁によって切られて

いる。覆土は黒色砂質土層で、灰色シルト粒を含む。

出土遺物には、須恵器、土師器の他、木製品として箸がみられる。36は須恵器の有台杯である。時期は7世紀後半頃とみられる。その他、細片だが9世紀代の須恵器が出土している。

第13号溝

F5～F3区に位置する。長さ145cm、幅40cm、深さ10～15cmを測る。溝底は平坦である。南北方向に走る溝で、南側は第1号溝と直交する。覆土は暗灰色砂質土層で、白色シルト粒を含む。

出土遺物には、須恵器、土師器があるが、細片のため図化できなかった。

第14号溝（第12図37）

D2～E2区に位置する。長さ6.3m、最大幅0.6m、深さ5cmを測る。第1号～第10号溝と同じく東西方向に走る溝で、西側は調査区外に延びている。覆土は灰色砂質土層で、黒色シルト粒を多く含む。

出土遺物には、須恵器、土師器、土錘がある。37は須恵器の杯蓋である。

4　ピット（第12図38～46、第13図、図版第7・第8）

ピットは、調査区全域に存在するが、北側に多くみられる。径40～50cm、深さ約30～50cmのものが多い。出土遺物には、弥生土器、須恵器、土師器、木製品などがあるが、図化できたものは少ない。

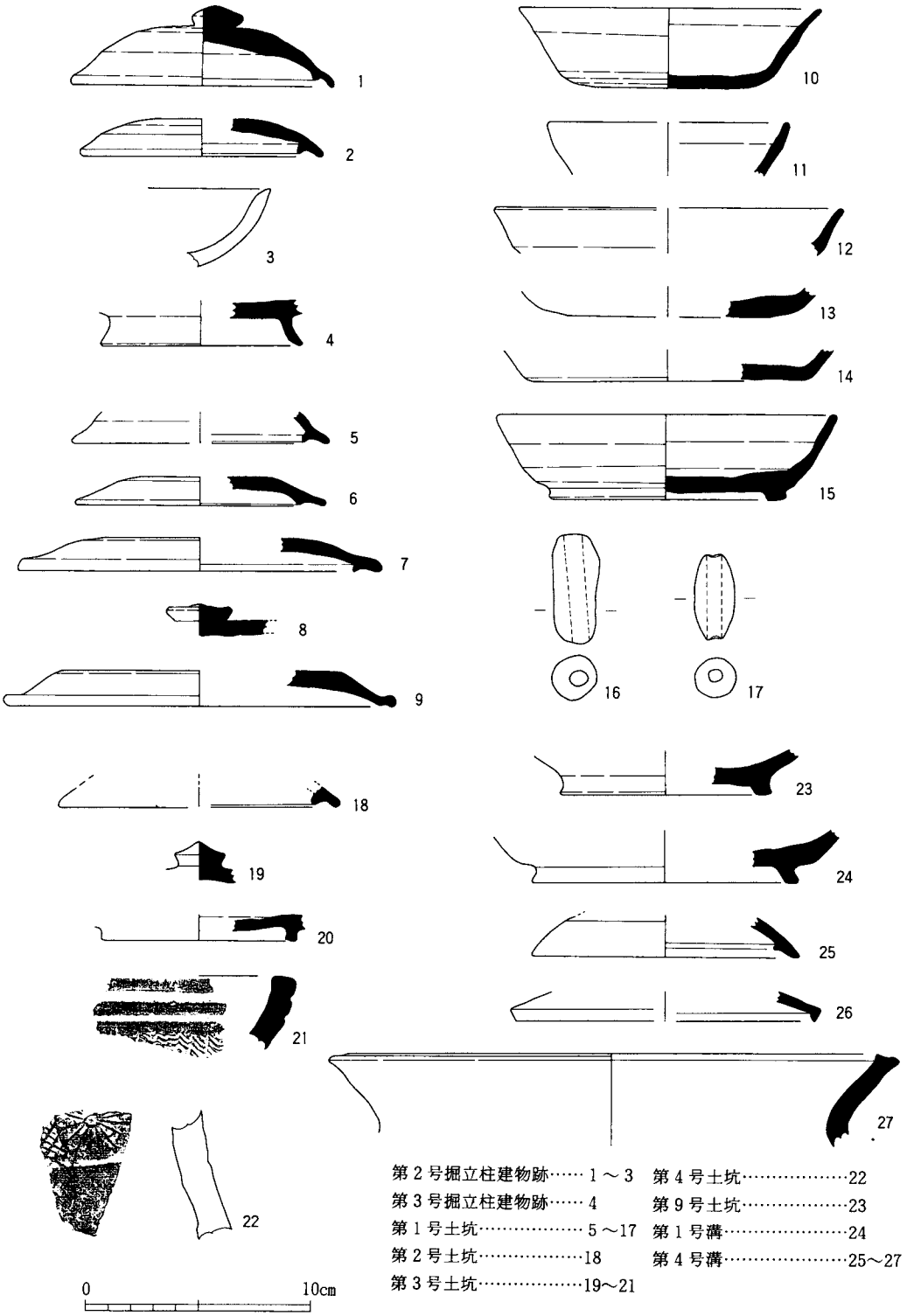
38は、P8から出土した須恵器の高杯脚部である。39は、P10から出土した須恵器の杯蓋である。40は、P14から出土した弥生土器の高杯脚部で、底径10.4cmを測る。弥生時代後期後半に属する。41は、P18から出土した須恵器の無台杯である。42は、P28から出土した須恵器の有台杯である。43は、P39から出土した弥生土器の甕の口縁部で、口径20cmを測る。弥生時代後期後半に属する。44･45は、P42から出土している。44は、須恵器の高杯脚部で、底径9.0cmを測る。45は、円面硯で面径12.7cmを測る。陸が平坦に作られ、外堤の約2.3cm内側に内堤がめぐる。陸は磨滅している。8世紀代の所産とみられる。46は、P44から出土した須恵器の無台杯で、外底に墨書があるが判読できない。また共伴する遺物として、先端が炭化した付け木状の木製品が出土している。

P13、P48からは礎板が出土している。第13図の1はP13から出土しており、長さ32.3cm、最大幅9.6cm、厚さ4.9cmを測る。一方の木口面は、ノミ状の工具で切断されている。木取りは柾目である。3～5はP48から出土している。3は長さ9cm、最大幅6.3cm、厚さ6cmを測る。4は長さ10.3cm、最大幅9.2cm、厚さ6.2cmを測る。3・4は3の右側面と4の左側面が接して出土した。5は長さ11.7cm、最大幅14.1cm、厚さは5.28cmを測る。木取りは板目である。

P51から出土した6は、柱根の可能性を残す。長さ45.4cm、最大幅21.4cm、厚さ9.2cmを測る。木取りは板目である。この他、P13から出土した2は礎板の可能性もある。

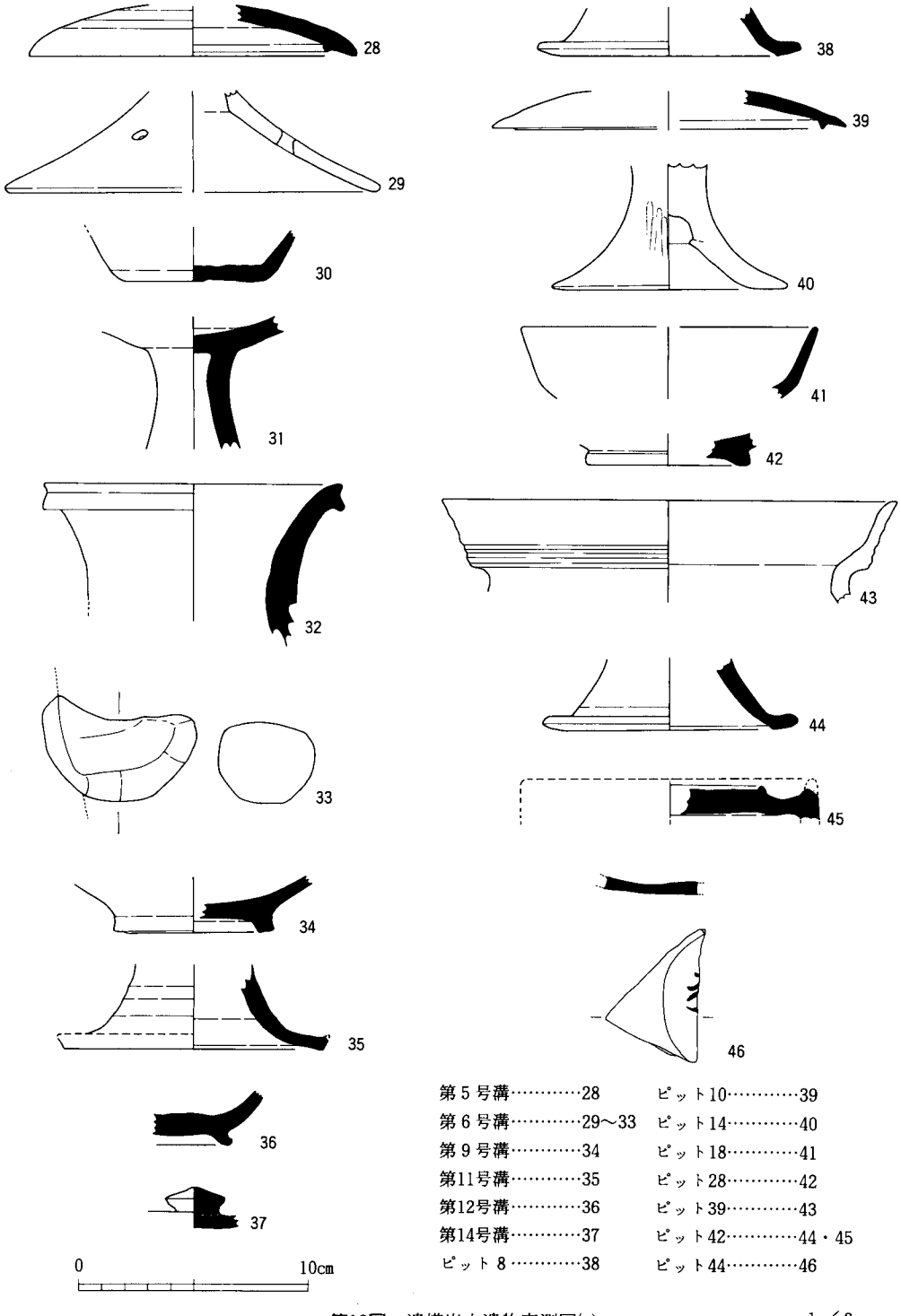
5　包含層出土遺物（第14･15図、図版第8）

包含層からは、縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、国産陶磁器、土製品、石製品が出土し



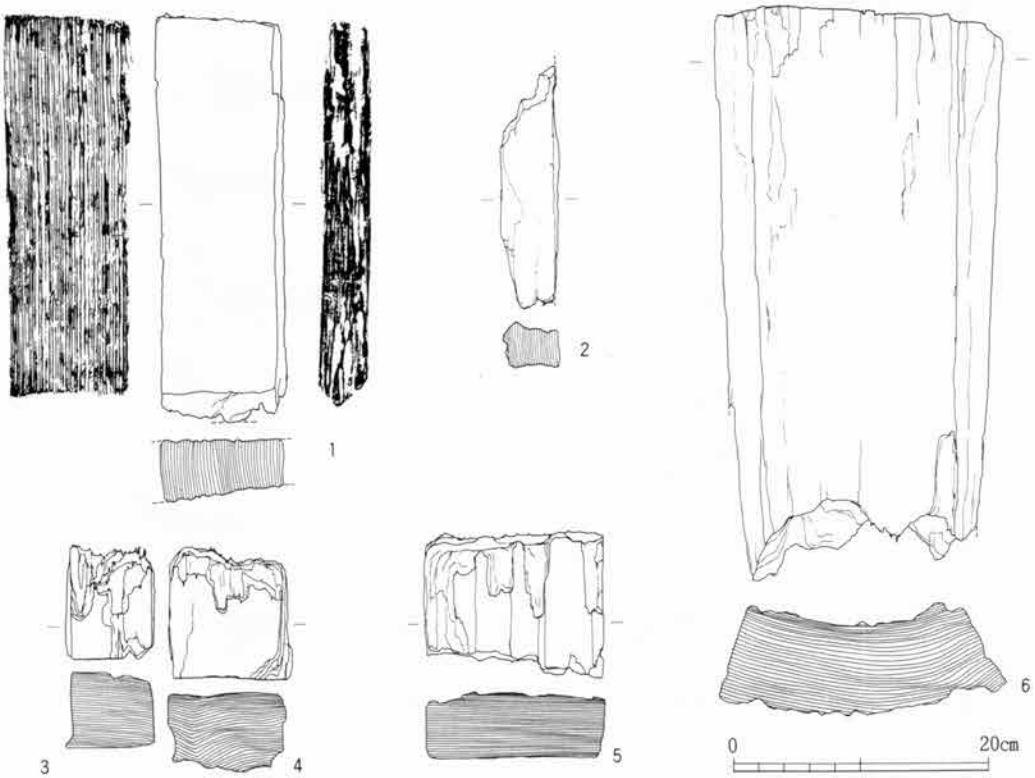
第２号掘立柱建物跡……１～３
第３号掘立柱建物跡……４
第１号土坑……５～17
第２号土坑……18
第３号土坑……19～21
第４号土坑……22
第９号土坑……23
第１号溝……24
第４号溝……25～27

第11図　遺構出土遺物実測図(1)　　1／3



第５号溝……28
第６号溝……29～33
第９号溝……34
第11号溝……35
第12号溝……36
第14号溝……37
ピット８……38
ピット10……39
ピット14……40
ピット18……41
ピット28……42
ピット39……43
ピット42……44・45
ピット44……46

第12図　遺構出土遺物実測図(2)　　1／3



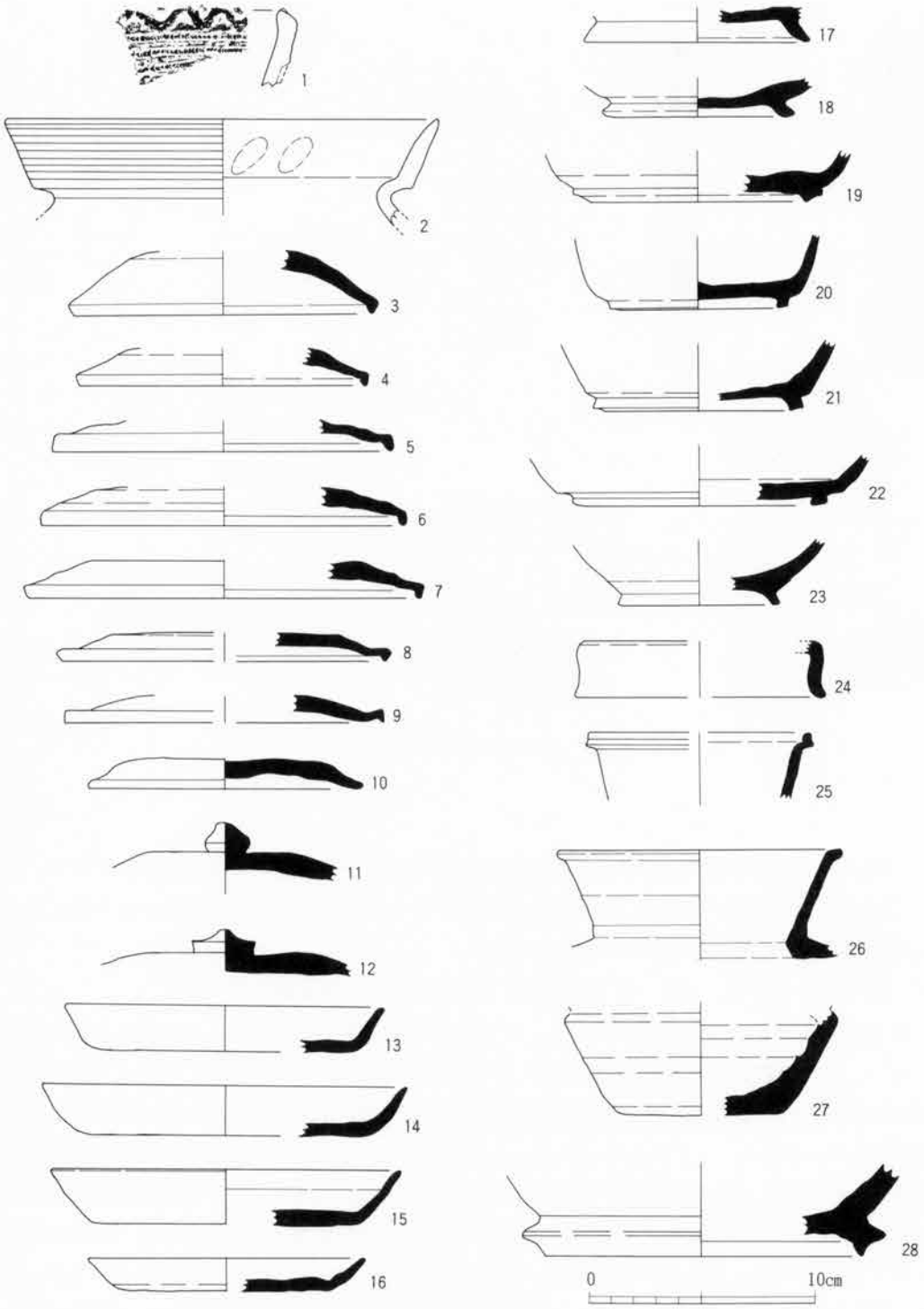
第13図　遺構出土遺物実測図(3)　　1／6

ている。

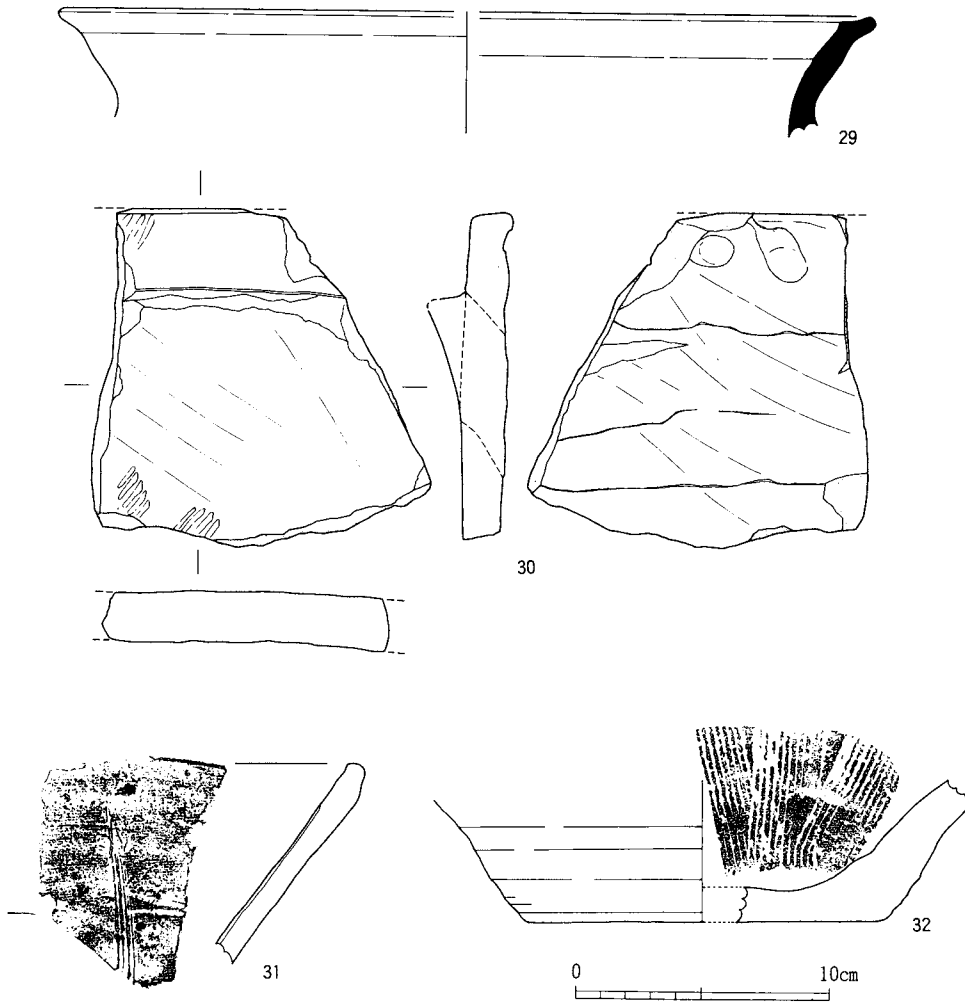
１は、縄文土器の深鉢とみられる。無文地の口縁部に結節状浮線文が３条巡らされており、内側に折り込まれた口縁部上端には、蛇行した粘土紐が貼り付けられている。福浦上層１期に類例がみられ、縄文時代前期後葉に位置づけられる[4]。

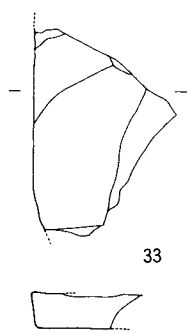
２は、弥生土器の甕で、有段口縁で擬凹線をもつ。弥生時代後期後半に属する。

３～31は須恵器で、３～12は杯蓋である。３～７の端部は深く屈曲する。８世紀前半頃のものとみられる。８・９は、９世紀前半頃のものとみられる。13～16は無台杯で、いずれも器高が低い。16は口径12.1cm、器高1.4cm、底径9.2cmを測る。17～22は有台杯である。17の底径は8.9cm、18の底径は8.4cmを測る。いずれも高台は高い。19の底径は10.9cmを測り、器肉が厚く高台は低い。20は底径7.8cmを測る。20･22は底部が直線的にのび、高台は低い。17･18は７世紀後半頃、19は８世紀初頭頃、20～22は８世紀前半頃と推定される。23は有台椀で、底径7.1cmを測る。10世紀後半頃のものと推定される。24～29は壺である。24は短頸壺の蓋である。25は長頸瓶の口頸部で、口径9.8cmを測る。26は広口壺の口頸部で、口径12.5cmを測る。27は小型壺の底部で、底径7.2cmを測る。28は壺の底部である。29は甕の口縁部である。口径32cmを測る大型品である。30は陶製品で、須恵器と同じ焼き上がりを示す。側面は板状を呈し、厚さ1.6cmを測り、断面三角形の突帯を有する。外面にはタタキが残り、斜め方向に粗いハケ調整を行っている。小破片であるため全形



第14図　包含層出土遺物実測図(1)　　1／3





D－３区……３・６・７・14・19
E－１区……17
E－２区……31・32
E－３区……23・29・33
E－４区……18
F－３区……５・24
F－４区……10・16・20
G－３区……１・９
G－４区……４・15
J－１区……25
J－２区……８・30
K－４区……21
K－５区……11
L－５区……２・13・26
P－５区……12
F－７区……22・27・28

第15図　包含層出土遺物実測図(2)　　1／3

は明らかにしえないが、陶棺の一部である可能性がある[5]。

31は、加賀焼の擂鉢の口縁部である。口縁端部は面取りされ、やや内傾している。内外面とも浅黄色を呈するが、外面上端部は焼成により色調を異にする。13世紀後半～14世紀前半の所産と考えられる。32は、越前焼の擂鉢の底部である。櫛目は11条を単位とし、内面は浅黄橙色、外面は橙色を呈する。16世紀代の所産と考えられる。33は仕上げ砥石で、板状を呈する。大きさは、縦8㎝、幅5.6㎝、厚さ1.3㎝を測る。石質はにぶい黄褐色を呈する泥岩である。表裏ともに平滑な砥ぎ面が残り、側面には切断痕が残る。近世の所産と考えられる[6]。

第3節　まとめにかえて（第16図・第2表）

軽海西芳寺遺跡は、弥生時代後期から近世にかけての複合遺跡である。主な遺構には、7世紀後半頃と推定される掘立柱建物跡が2棟と、それと主軸を同じくする掘立柱建物跡が1棟、その他9世紀から10世紀にかけて廃棄された溝や土坑などがある。遺構の配置をみると、北側の調査区全域にわたって東西に溝が走り、第13号溝だけが南北方向に走る。調査区中央にある近世の溝を挟んで、その北と南に掘立柱建物跡が並んで立地する。

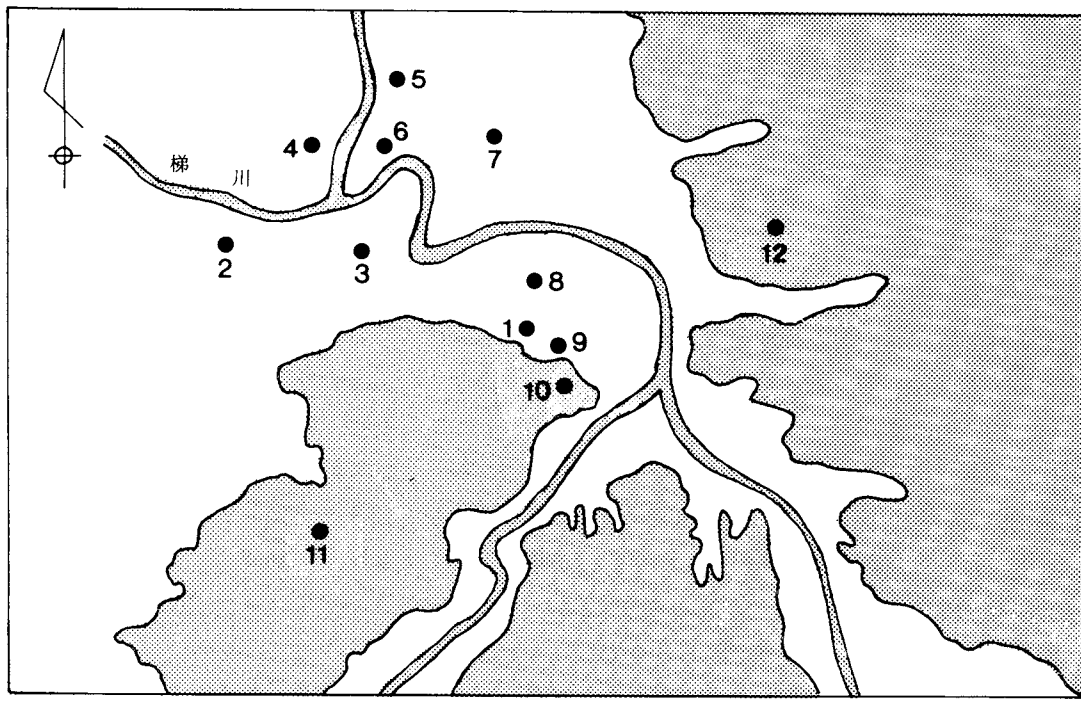
本遺跡の主な形成時期が7～10世紀と考えられることから、本節では、軽海地域を含む梯川中流域における7～10世紀の遺跡の動向を概観して、まとめにかえたい。

まず7世紀には、佐々木ノテウラ、千代オオキダの各遺跡で掘立柱建物跡が検出されており、7世紀後半から8世紀前半にかかる時期と推定されている。漆町遺跡では、6世紀に入ると遺跡が縮小する傾向を示すが、7世紀後半頃から金屋・サンバンワリ地区などで再び遺構がみえ始める。

8世紀には、千代オオキダ、古府しのまち、古府の各遺跡で溝や土坑などが検出されており、同中葉頃の遺物が出土している。漆町遺跡の金屋・サンバンワリ地区では、8世紀後半頃から掘立柱建物跡が出現し、その後増加する。荒木田遺跡では、8世紀後半～10世紀前半頃の掘立柱建物跡や、8世紀後半～9世紀前半頃の水場とみられる遺構を検出している[7]。この遺構からは、「南房」「水通」などの墨書土器や帯金具が出土しており、包含層からは石帯が出土している。官人の存在をうかがわせており、注目される遺跡である。

9世紀には、漆町遺跡の金屋・サンバンワリ地区や荒木田遺跡で、引き続き掘立柱建物跡がみられ、佐々木ノテウラ遺跡では、9世紀後半頃と推定される掘立柱建物跡や柱列跡が検出されている。古府遺跡では、遺構や遺物は多くみられるが、掘立柱建物跡は検出されていない。

10世紀には、梯川中流域の多くの遺跡が盛期を迎える。漆町遺跡の金屋・サンバンワリ地区では、掘立柱建物跡が著しく増加する。金屋・ヤシキダ、白江・チョウジャワリ、白江・ネンブツドウ（南）の各地区でも掘立柱建物跡が検出されており、10世紀前半頃の瓦が遺跡全体で約30点出土している。佐々木ノテウラ遺跡では、溝や柵に囲まれた掘立柱建物跡が検出されており、10世紀前半頃の墨書土器や瓦が出土している。浄水寺跡では、6棟の掘立柱建物跡が検出されており、大溝からは大量の墨書土器をはじめ中国製陶磁器、緑釉・灰釉陶器が出土している。墨書土



第16図　梯川中流域における９～11世紀の遺跡分布図　　１／50,000

第２表　梯川中流域における７～11世紀の遺跡の動向

遺跡名＼世紀	7	8	9	10	11
1 軽海西芳寺	―		―	―	
2 漆町	------―	―	―	―	―
3 佐々木ノテウラ	―	―	―	―	
4 千代オオキダ	―	―	―	―	
5 古府しのまち		―			―
6 古府	---	―	―	―	
7 十九堂山	―	―	---	―	
8 荒木田		―	―	―	
9 西芳寺			---	―	---
10 軽海廃寺			---	―	
11 浄水寺		―	―	―	―
12 里川E			―	―	

（表の番号は、第16図の番号に符合する。）

器には「浄水寺」という文字もみられ、この時期に寺院としての本格的な活動が始まったと推測されている。里川E遺跡では、山林の中腹に形成された平坦面に、大型礎石建物跡と掘立柱建物跡が検出されており、9世紀末から10世紀前半の土器と、多数の鉄釘が出土している。浄水寺とともに山林寺院跡と考えられている。その他、古府、西芳寺、十九堂山の各遺跡や、軽海廃寺などでも10世紀前半頃の瓦が出土している。

さて、文献史料で軽海の名は、10世紀前半に成立した『和名類聚抄』[8]に初見される。それによると、軽海は加賀国能美郡に所属する郷で、「加流美」或いは「加留美」と訓ずる。本遺跡が所在する軽海町は、その遺称地とされることから、軽海郷に包括されていたものと思われる。また、『和名類聚抄』の流布本によれば、軽海郷が属する能美郡に国府が設置されたと記されており、小松市古府町周辺がその所在地と推定されてきた。しかし近年、弘仁14（823）年の立国当初には、国府は所在しなかったのではないかとする説が提示されている。北野博司氏は、梯川中流域の遺跡群の動向から、立国時の国府能美郡説に疑問を示し、9世紀前半～10世紀前葉と11世紀の2時期に、加賀郡に国府が所在した可能性があるとしている[9]。小嶋芳孝氏は、立国当時の国府所在地を加賀郡に求め、戸水C遺跡や黒田遺跡をその候補地にあげている[10]。出越茂和氏は、10世紀中葉頃に加賀郡から能美郡に国府が移転したと推測している[11]。

梯川中流域の遺跡の動向をみると、10世紀代に盛期を迎える遺跡が多く、この時期に能美郡に国府が移されたという見方も可能である。10世紀前半の瓦を出土する遺跡が多いことも、注目されるところである。また、浄水寺跡や里川E遺跡といった山林寺院が、この時期に梯川中流域に出現することは、国衙との関連で検討する必要があろう。

註

(1) 須恵器の年代比定については、次の文献に依拠している。田嶋明人「古代土器編年軸の設定」『北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編　北陸古代土器研究会　1988　金沢。
(2) 宮下幸夫・田嶋正和・藤田邦雄・垣内光次郎「中世加賀の窯業研究―加賀焼の現状と課題」『石川考古学研究会々誌』第33号　石川考古学研究会　1990　金沢。
(3) 大橋康二『肥前陶磁』　ニューサイエンス社　1989　東京。
(4) 西野秀和・久田正弘氏から教示を得た。
(5) 入江文敏「北陸地方出土の陶棺―列島の古墳時代史への位置づけ―」『阡陵』　関西大学博物館学課程　1992　吹田。
(6) 垣内光次郎氏から教示を得た。
(7) 『荒木田遺跡』（現地説明会資料）　石川県立埋蔵文化財センター　1992　金沢。
(8) 高山寺本・大東急記念文庫本・那波道円刊古活字版本による。出典は『加能史料　平安Ⅱ』加能史料編纂委員会　1985　金沢。
(9) 北野博司『佐々木ノテウラ遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1986　金沢。
(10) 小嶋芳孝「高句麗・渤海との交流」『日本海と北国文化』海と列島文化1　小学館　1990　東京。
(11) 出越茂和・楠正勝『金沢市千木ヤシキダ遺跡』　金沢市教育委員会　1987　金沢。

第4章　平成4年度調査の遺構と遺物

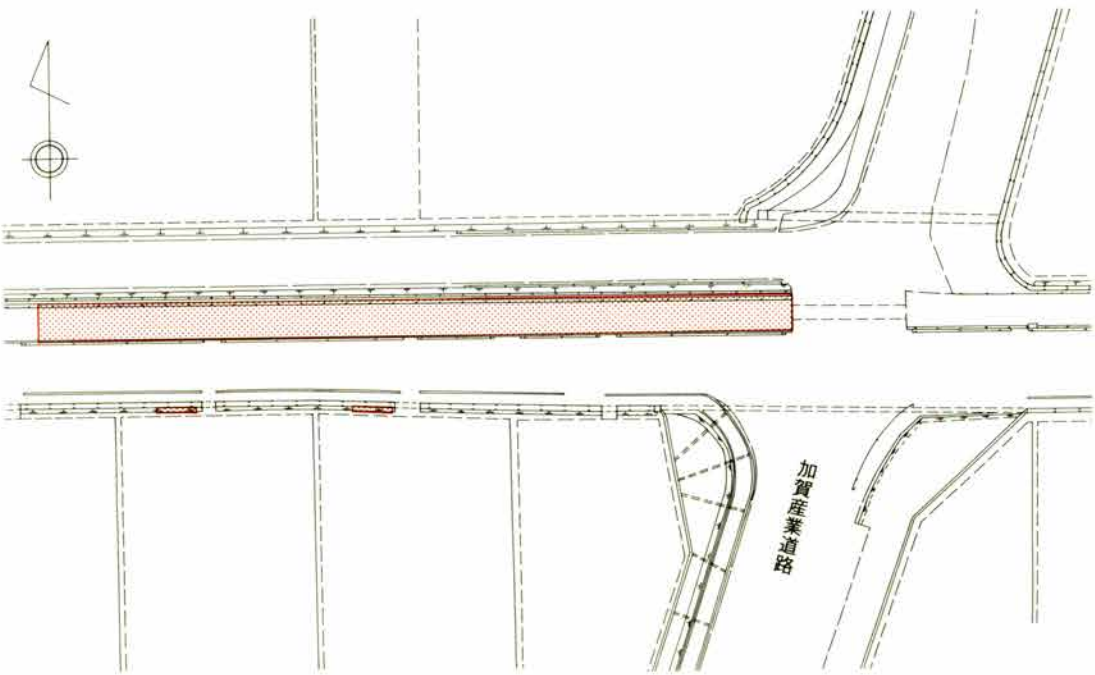
第1節　概　要

調査区は北陸鉄道小松線跡と県道小松下吉野線の間幅約3.5mを軽海交差点から西側へ約115mと、県道を挟んで二ヵ所にトレンチを設定した。区割は、軽海交差点の西側路肩付近に0m点を置き、そこから西側へ実際の距離により設定した。したがって、遺構・遺物等は何mラインの何々と述べる。また、県道を挟んで南側に設定したトレンチは、軽海交差点側から第1、第2トレンチとした。調査区の層序は、基本的に上から1層：盛土、2・3層：旧耕土、4層：褐灰色土（包含層）、5層：青灰色粘土（地山）となる。1層は、カドミウム汚染土の入れ替え土、2・3層は近世以前の水田耕土、4層は古代以前の包含層であろう。検出した遺構はピット・溝などである。また、遺物の出土量もきわめて少なく、本調査区の特徴を示している。

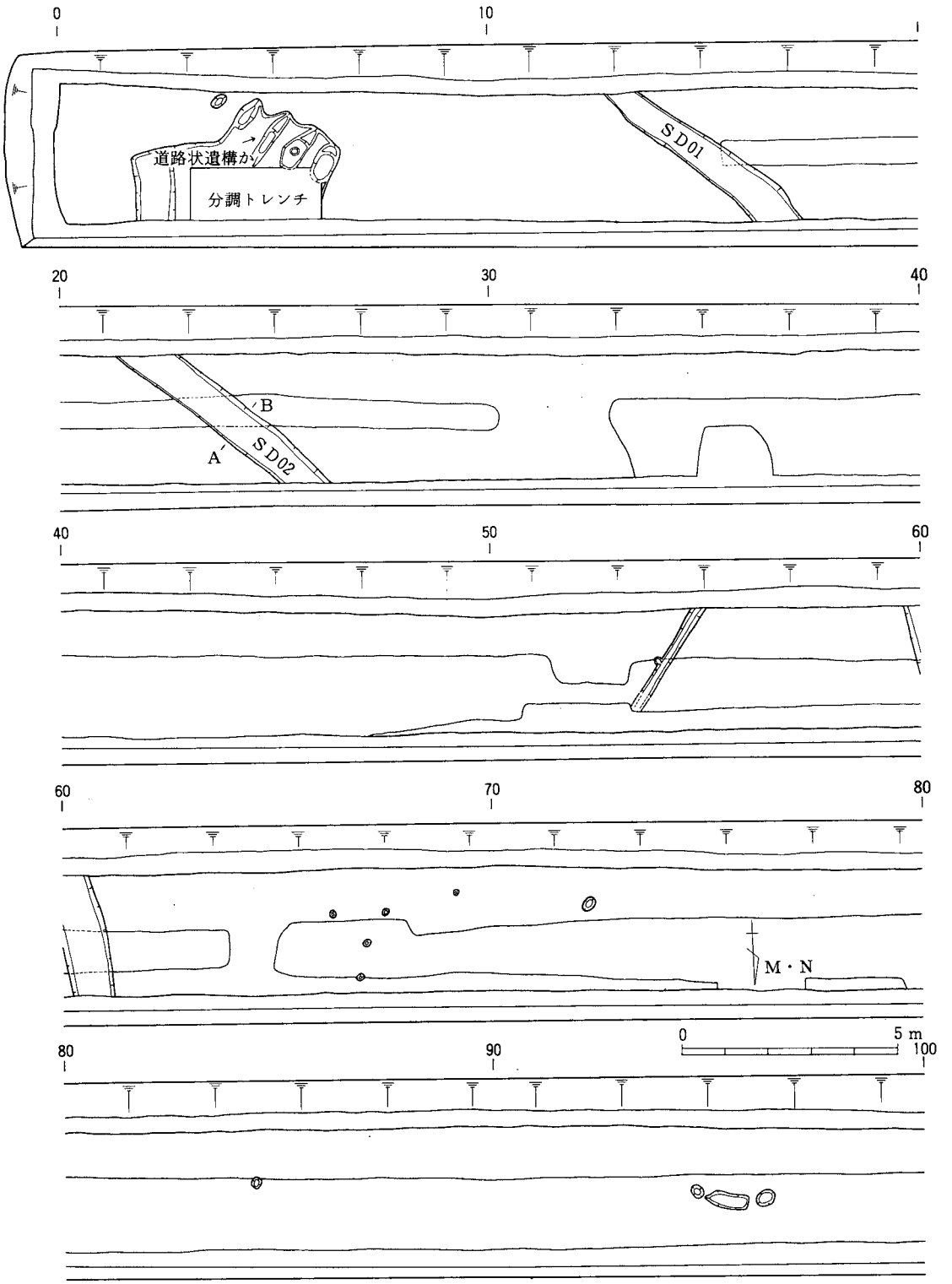
第2節　遺構と遺物

3～7mラインには、南東から北西方向に5つ並ぶピット状の遺構がある。深さは15～30cmを測る。これらは波板状遺構[1]といわれる道路状遺構の可能性もある。

12～18mラインの第1号溝は、幅60～100cm、深さ3cm程度の浅い溝である。溝内のレベルをみると南東から北西方向に水が流れていたと推定できる。遺構内に堆積した土壌の状況から、おそ



第17図　調査区位置図



第18図　調査区平面図

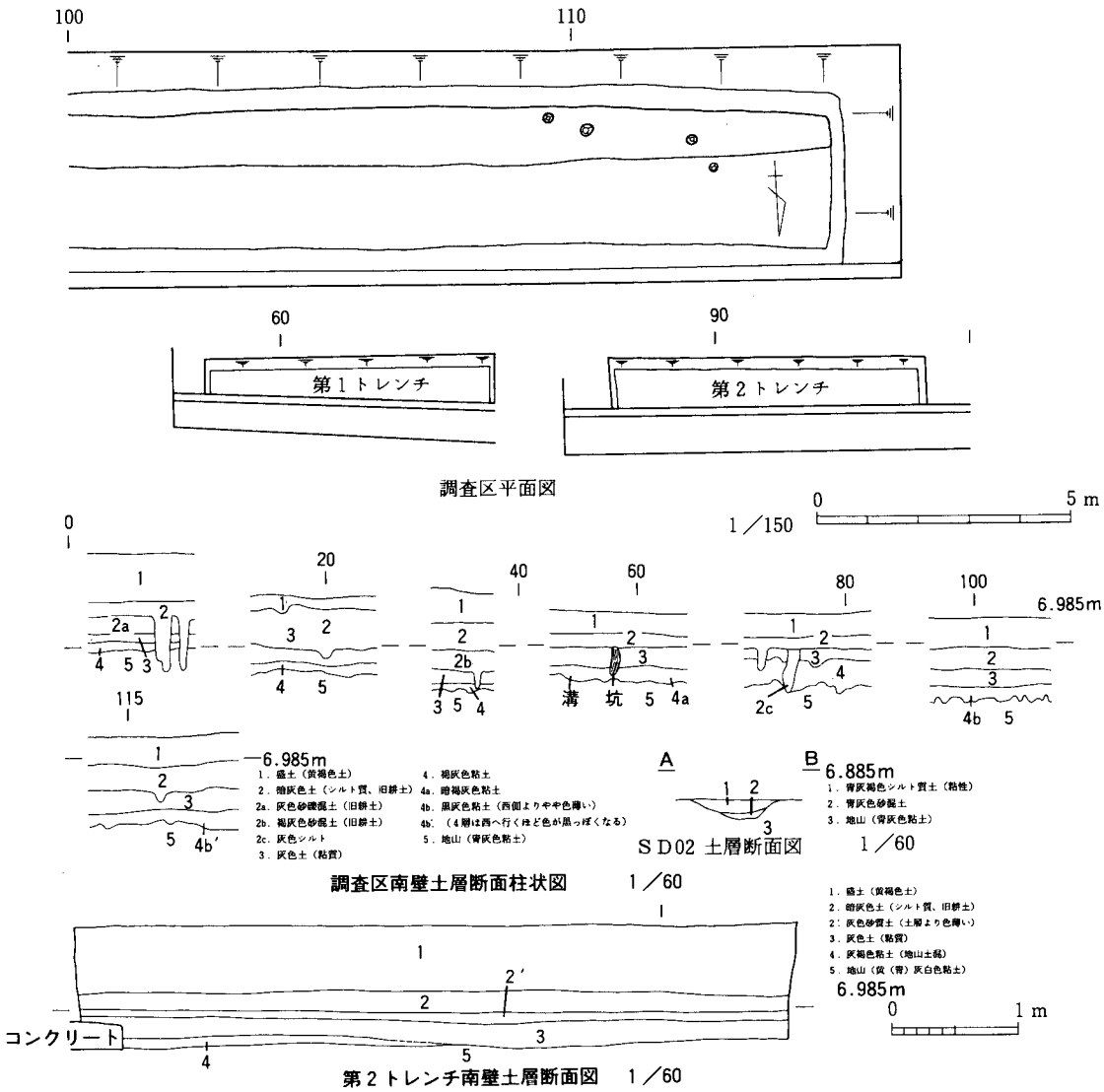
1／150

らく古代の溝と推定している。

21～26mラインの第２号溝は、幅90～100cm、深さ14cmを測る浅い溝である。第１号溝と同じ方向に水が流れていたと推定できる。土層の堆積状態からも、水が流れていたことが確認できた。弥生時代後期末の月影式期に属する、やや古い様相を残す甕の口縁部が出土している。また、遺構内の覆土の状況も第１号溝とは異なることから、弥生時代後期末頃の溝と推定できる。

53～55mラインの溝は、幅20～30cm、深さ５cm程度を測る浅い溝である。南西から北東方向に水が流れていたと推定できる。遺構内覆土の状況、方向などから見て、第１号・第２号溝よりは少なくとも新しい時期のものだろう。

59～62mラインの溝は、幅90～100cm、深さ４cm程度を測る浅い溝である。ほぼ南から北に水が



第19図　調査区平面図・土層断面図

流れていたと推定できる。これも、第1号・第2号溝よりは時期的に新しいものだろう。

62mライン以西では、溝は検出できないが、深さ10～20cm前後の小ピットを検出している。いずれも掘立柱建物が建ちそうなピットではないが、調査区域外にピットが存在している可能性もあり、完全に否定するものではない。

遺物（第20図）は前述したように少ない。遺構出土遺物は第2号溝の甕の口縁部以外は図示できるものがない。包含層からは、6世紀初頭の須恵器高杯身、7世紀第2四半期頃の杯G身などが出土している。須恵器高杯身はその胎土と形態から和泉陶邑窯産のものと推定できる。杯G身は在地産と考えて間違いないだろう。その他の遺物は、細片であり実測に耐えうるものはない。

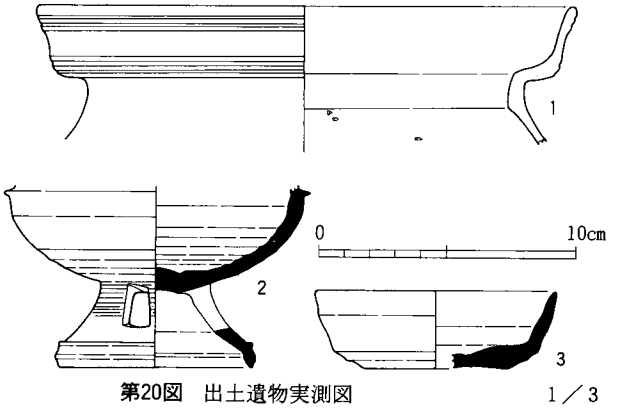
平面図にスクリーントーンで示した部分は、鉄分やマンガンによって褐色に変色している範囲である。変色していない部分は、疑似畦畔[2]と呼ばれるもので、2・3層の旧耕土にともなう畦畔などの状況を示すものと推定している。

なお、平面図では遺構内には変色が及んでいないように見えるが、これは図が見にくくなるためであり、実際は変色が及んでいる。遺構内に点線で示した部分がそれである。

また県道南側の二つのトレンチからは、遺構・遺物とも検出できなかった。土層の堆積状況は県道北側の状況と変わりはない。

第3節　まとめ

今回の調査では建物等の遺構を確認することはできなかった。遺跡の縁辺部に当たるからであろう。第5層の地山面のレベルと平成3年度調査区の地山面のレベルの差を見てもらえば分かるように、かなり低くなっている。集落は東側の微高地上に営まれていたといえよう。



第20図　出土遺物実測図　1／3

今回の調査区は、水田として弥生時代より利用され、第1号・第2号溝等の南北に横断する溝は水田の用排水路として、また何らかの区画溝としての機能も同時に有していたと推測したい。今後の調査研究により、梯川流域の土地利用状況等が明らかになることを期待する。

注

(1) 枕木状の丸太などを置いた痕跡といわれる。近世の例ではあるが、大津ロクベエ遺跡［土屋1993］で同じ様な遺構が確認されている。

(2) 水田の稲の根が地中深く入り地上水を地中深く浸透させたり、地下水が変動することによって根跡に鉄分やマンガンが沈着して変色し、あたかも畦畔のようにみえるものをいう［工楽1991］。

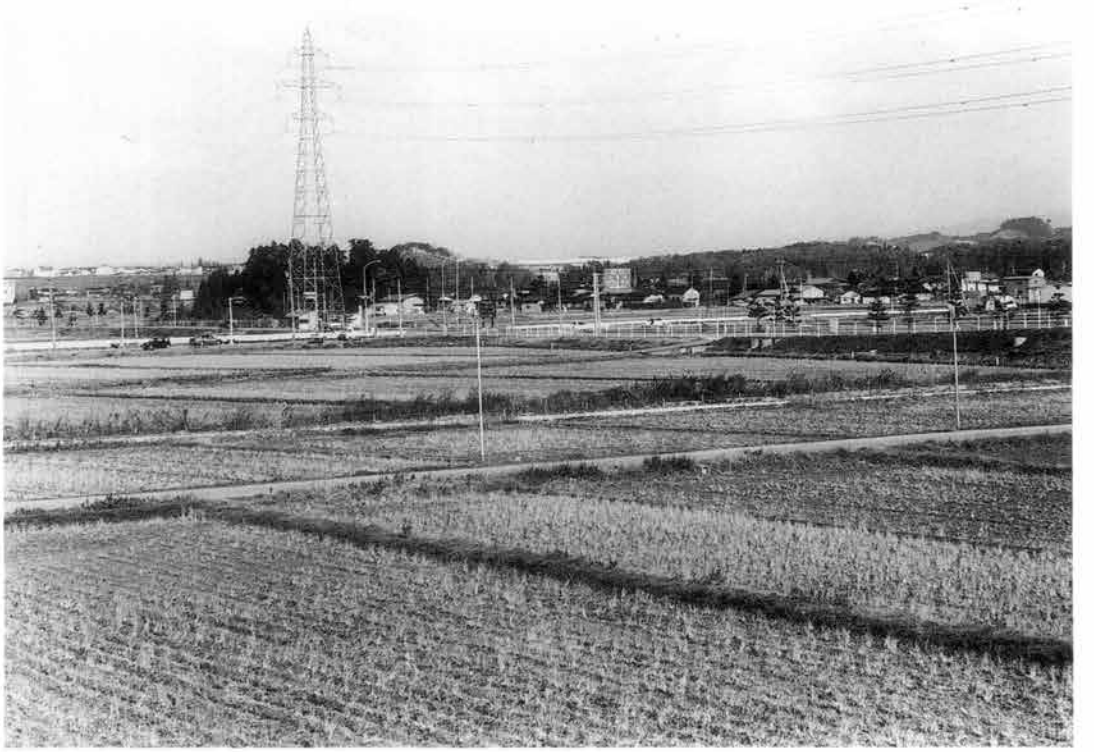
［参考引用文献］

工楽善通　『水田の考古学』東京大学出版会　1991

土屋宣雄　『大津ロクベエ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター　1993

図　　版

軽海西芳寺遺跡の位置　　1／10,000



(1)　遺跡遠景（西から）

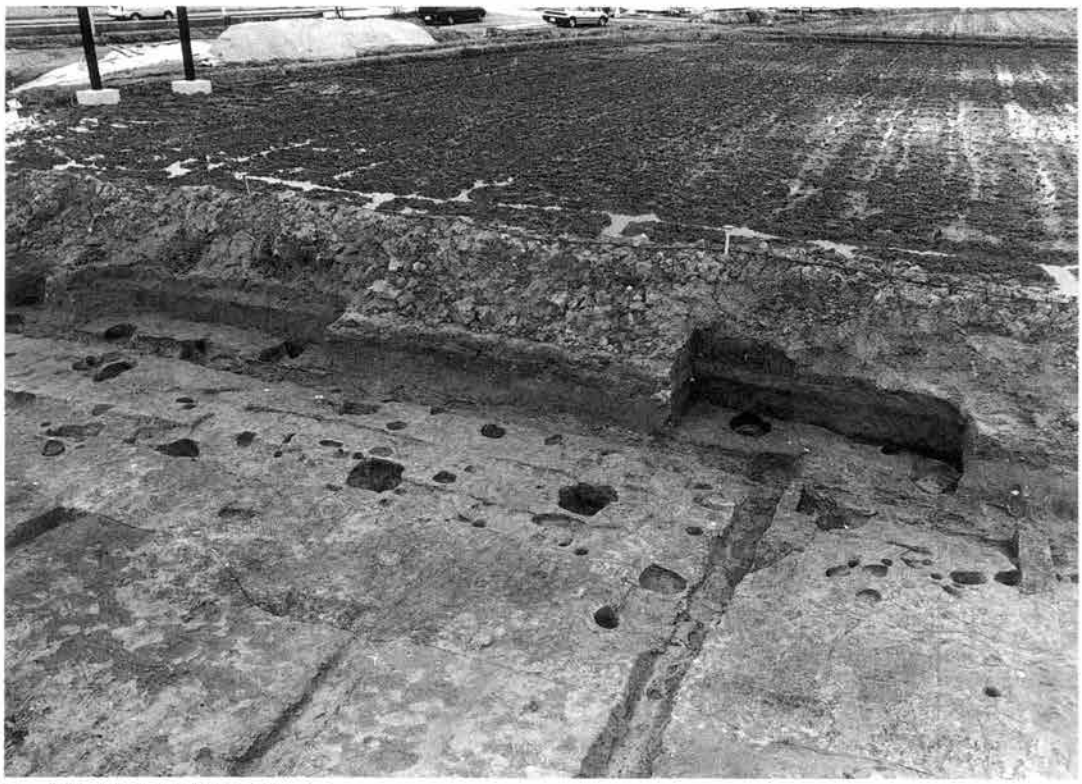
(2)　調査区全景（南上空から）

(1)　調査区全景（東から）

(2)　調査区全景（西から）

(1)　調査区全景（西から）

(2)　第１号～第10号溝（西から）



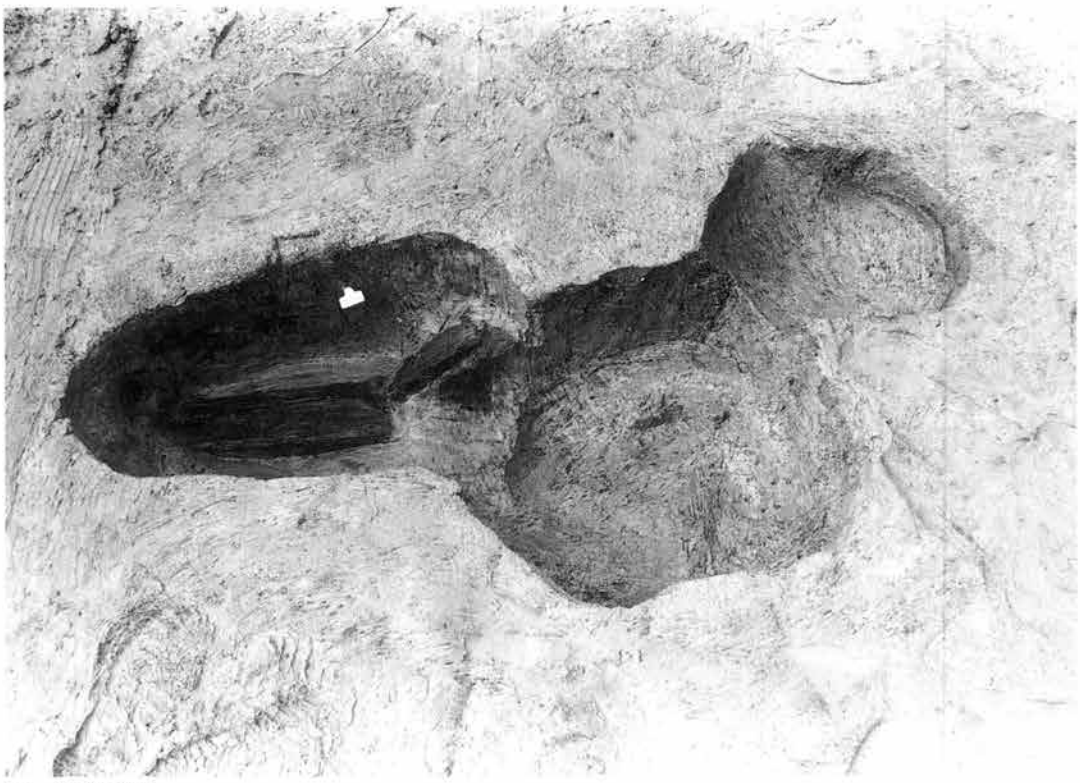
(1)　第2号掘立柱建物跡（南から）

(2)　第3号掘立柱建物跡（北から）

図版第6　遺　構（平成3年度調査）

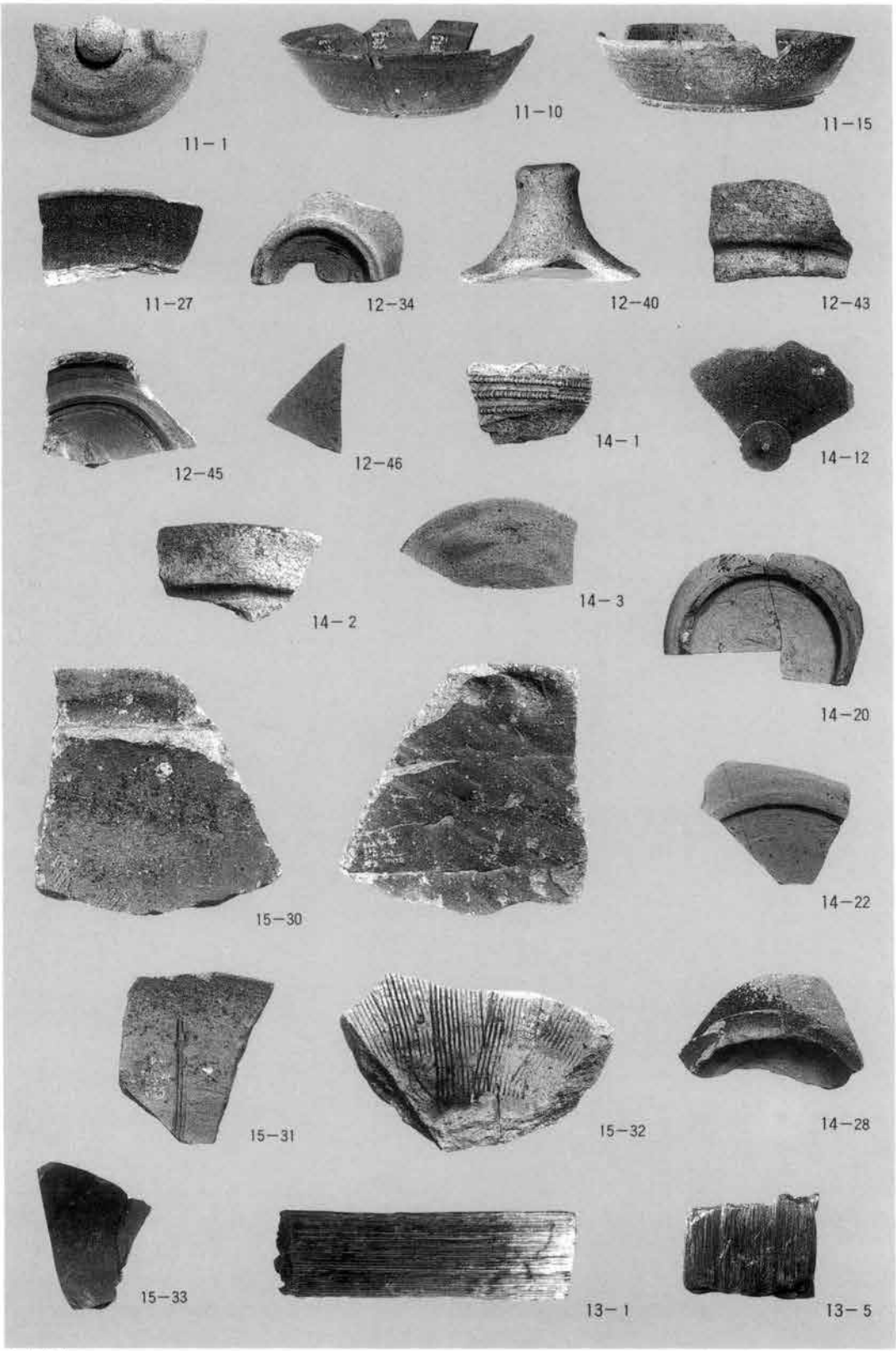
(1)　第11号溝（東から）

(2)　第12号溝（東から）

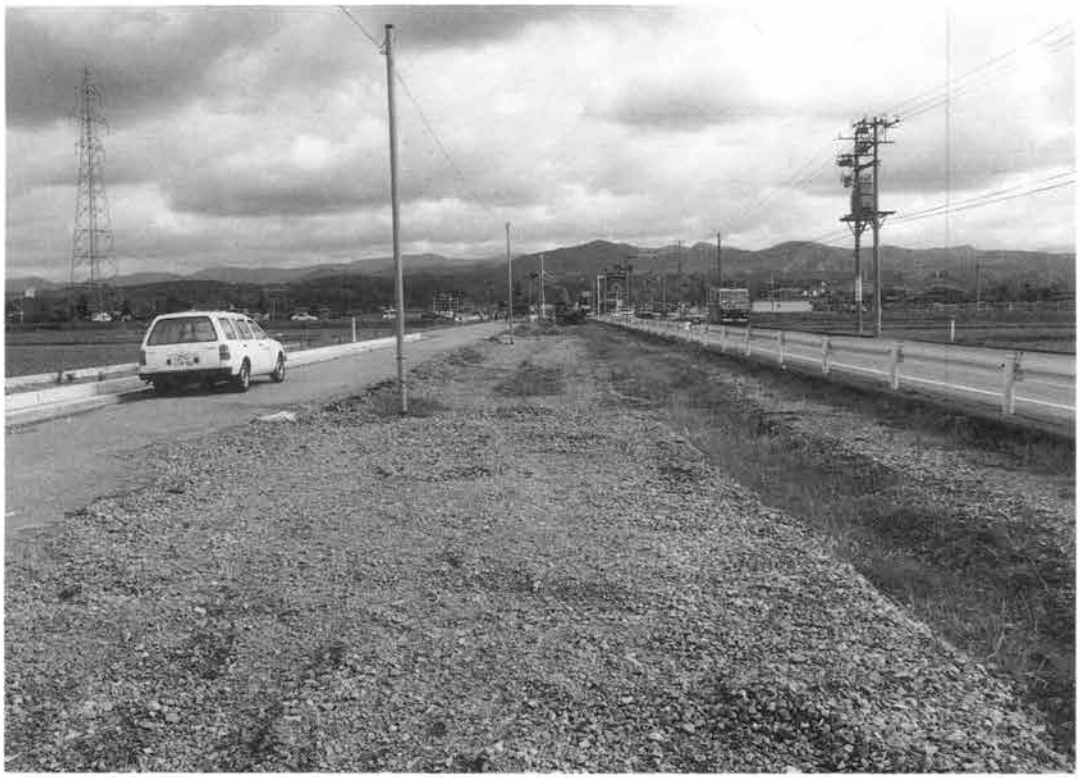


(1)　P13の礎板

(2)　P48の礎板



出土遺物　　1/3・1/6（13－1・13－5）



(1)　表土除去作業（西から）

(2)　表土除去作業（東から）

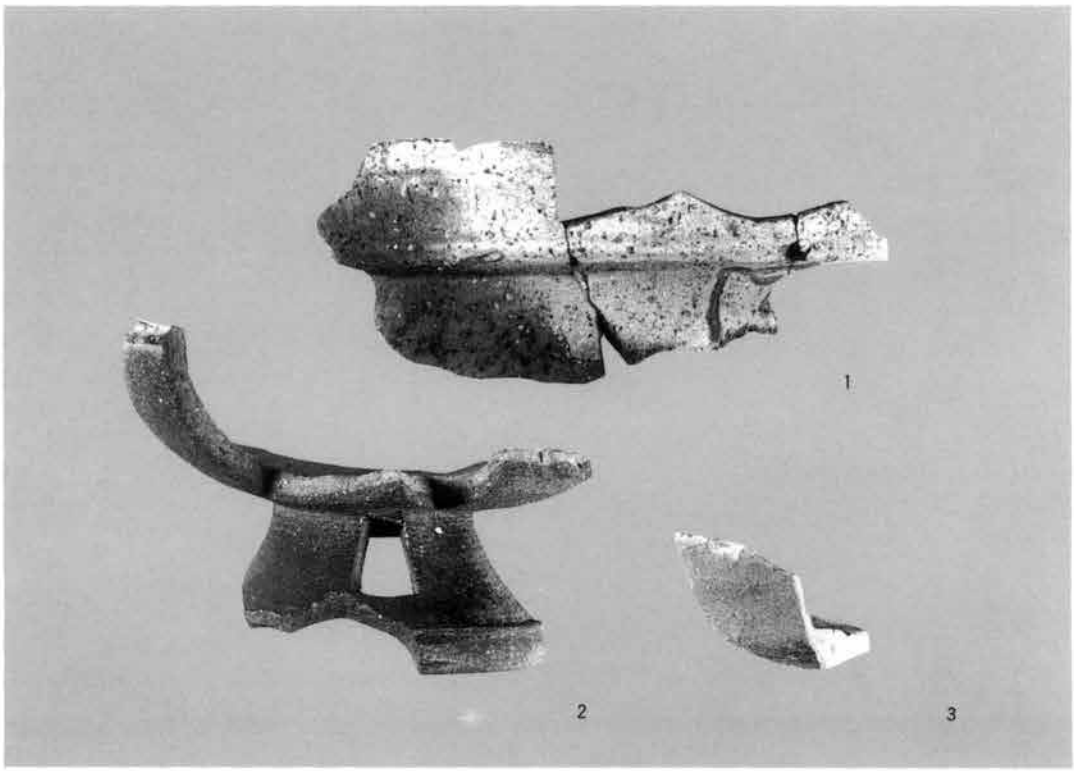
(1)　調査区全景（東から）

(2)　調査区全景（西から）

(1)　道路状遺構の可能性のある溝群（北から）

(2)　第2号溝全景（北西から）

(1)　第2トレンチ



(2)　出土遺物

軽海西芳寺遺跡

平成6年3月20日　印刷
平成6年3月31日　発行

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町4丁目133番地
〒921　電話（0762）43－7692番(代)

印　　刷　能登印刷株式会社
石川県金沢市武蔵町7番10号

©石川県立埋蔵文化財センター　1994
本紙用紙：書籍用紙イエロー（中性紙）72kg